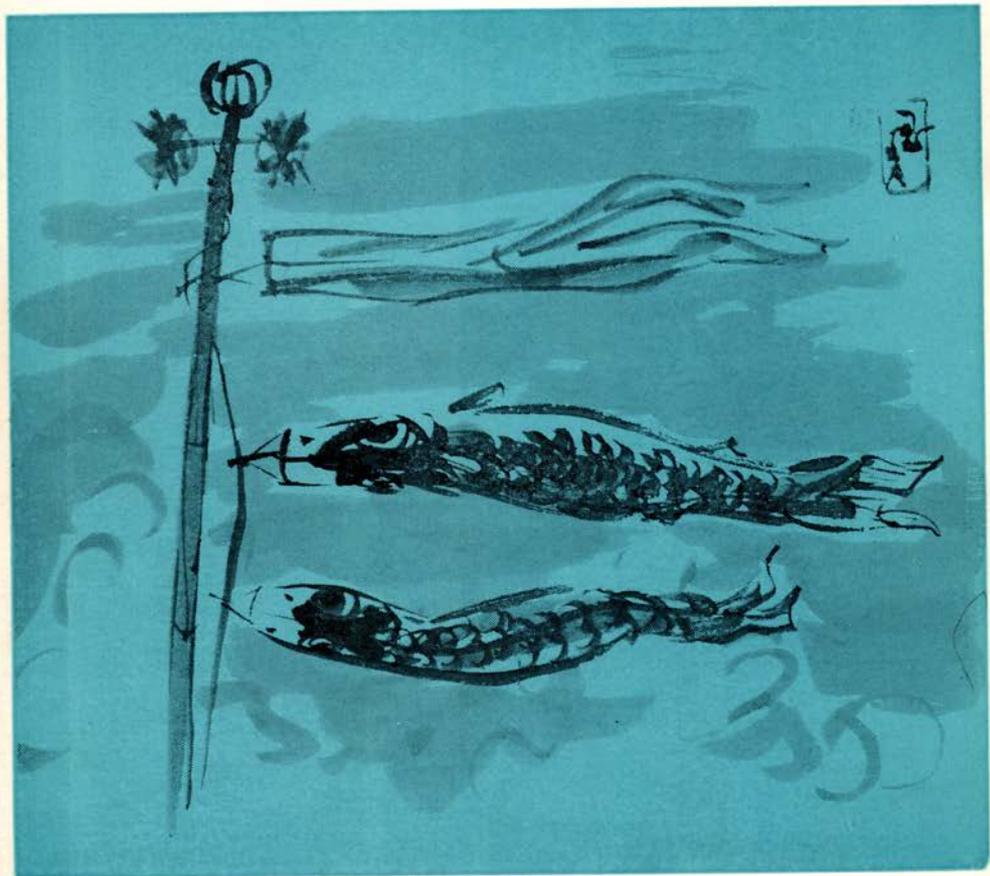


# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十二年四月二十五日 印刷  
昭和四十二年五月一日発行 (毎月一日発行)  
(第二十号)



No. 20

特集・口語か文語か

五月号

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた  
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)  
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な  
海岸美を  
誇る

麻生路郎著

新川柳鑑賞

定価 二五〇円  
送料 一一〇円



多々名薬品

疲れ  
肩こり  
食欲不振  
つかれ目  
神経痛に



アリナミン

橘高薫風著  
句集  
れも  
ん

送料共 五〇〇円



コクヨ  
便箋

弦を離れる矢のきびしさの瞬間よ  
裏切りの澄んだ瞳が鼻にぬけ  
探しあてて見ればきれいな嘘の影  
口先きの誠意は美事な声で枯れ  
裏切りは当然の顔で今日終る

## 今月のことば

◎一生に一度という言葉をよく耳にする。しかしほんとは一度しかないものは死である。嫌でも応でも必ず来る自分の死のために備えて遺言というものがある。医者としての私の友人に癌と闘いながら、外科医学者として後進に教え、父として子を訓し、夫として妻に謝した実に美事な遺書がある。又、別の友人は事業家として大成したが、後事を託する遺書を書いた。折りも折、妻女が重篤な大病に仆れ絶望と聞くや氣をとりなおし妻女他の人に託する遺書に改めた。然し結局は自分が

妻女より早く逝った。誰でも書いてみようかなと思う事は一度や二度はあると聞く。真偽のほどは知らぬが桂春団治は生前映画をとらせて「ホナさいなら。あの世で待ってますさ」と画面から消えたそうだ。ふざけるは別として、深夜独り淡々として静かに遺書を書く事はわれわれ凡人ではなかなか困難なものらしい。

◎一生に一度の大事が今の世の中にはごろごろしてゐる。敢えて交通戦争だけではなしに。

# 川柳塔 五月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖 ..... 中島生々庵 ..... (1)

川柳塔 ..... (同人作品) ..... 中島生々庵選 ..... (4)

★口語か文語か ..... (同人特集) ..... (20)

工藤 甲吉・早川 清生・橘高 薫風・服部十九平 (到着順)

近 詠 ..... 麻生 葭乃 ..... (24)

再びハワイを訪ねて ..... 若本多久志 ..... (40)

川柳二〇〇年 ..... 戸田古方 ..... (42)

明智 光秀 ..... (川柳戦国志・十) ..... 富士野鞍馬 ..... (30)

秀句鑑賞 ..... (前月号から) ..... 後藤梅志 ..... (28)

川傍柳初篇研究 ..... (四十七) ..... (18)

前田喜代人・岡崎重義・清 博美・藤井和雄・

川端柳風・故高須啞三味・丸 十府・岡田 甫・

酔蟹と冷飯 ..... (大陸巷談) ..... 東野大八 ..... (26)

盲 抄

初 作 の 思 い 出

あ の 頃

三太郎先生の紫授・喜寿祝賀

女流作家はいつ作句するか

川 柳 の 省 略 法

近 作 柳 樽

雅号ぶっちゃけばなし

大萬川柳「庇」 入選発表

初 歩 教 室

★ 柳 界 展 望

★ 本 社 四 月 旬 会

★ 各 地 柳 檀

一 路 集 「冒 険」 「青 葉」

関西短詩文学作品展

高 鷲 亜 鈍 (25)

奥 谷 弘 朗 (39)

島 田 兼 孝 (58)

橋 高 薫 風 (44)

池 田 あ や 子 (27)

吉 田 水 車 (58)

北 川 春 巢 選 (32)

高 橋 操 子 (51)

奥 谷 弘 朗 (55)

山 内 静 水 (57)

清 水 白 柳 選 (50)

菊 沢 小 松 園 (46)

(薫 風) (52)

(肅 佐) (54)

(文 秋) (59)

仲 どんたく 選 (48)

川 岡 靈 眼 子 選 (48)

白柳・三夫 (64)



中島生々庵選

岡山県 浜田久米雄

テレビからのぞく地球がせまくなり

金のない顔にみんなが見てくれず

春の雨すこしは濡れる気で出かけ

春の雨飲み友達を探して見

酒の値が俺にだまつたまま上り

高槻市 傍島静馬

婆あさんも嫁も外ではよく喋り

ひと悶着あつたと見えぬヒナ飾り

ガリ勉を見下ろす壁のプロマイド

さざ波のそこだけ友禅色になり

議員憲章作らにや衿が正されず

大阪市 正本水客

はだかの木々に赤味を帯びてくる日日月

広く浅くという知識へ相づち打つておく

物干も春色うごくものを出し

丹前のほころびへ女将話好き

さくら餅の香をなつかしむ人と坐す

大阪市 橘高薫風

税務対策戦陣訓を思い出す

猿の鎖象の鎖も春となり

赤帽もそのうちみんな齢をとり

三太郎先生への祝吟

紫綬やよし詩人の胸をいろどるに

会津行

飯盛山遺恨の如く雪残る

愛媛県 村上旭童

ポーナスをばつばとつこて淋しがり

雑魚ばかり寄つて選挙の酒をのみ

暴君のね顔はじつと見つめられ

春雨へ今日一日をねて農夫

もうかつただけで食う気の歳になり

大阪市 後藤梅志

椿おちたところにほのかな土のかおり

女房の野暮を笑える五十過ぎ

共稼ぎくせのある字の置き手紙

明治回顧

焼いもがぬくい夜学のかぐら坂

満員に乗れば車掌に抱えられ

青森市 工藤甲吉

恍惚のひととき冬の虹を見る

しらゆきを冠り童話の街となる

ふぶく夜は貧しき者を寄り添わせ

とむらいの列が凍えて行く真冬

下関市 国弘半休

伊勢にて

愚痴一つ言わず五十鈴川流れ

大神の素朴造りに身が締まり

南紀観光

舟の位置変えて駱駝岩撮らせ

巖ばかり賞めて串本とも別れ

倉敷市 木村千容

八十年おいまぐられた貨幣価値

世話焼きはご免ねそつとしておいて

春を待つところやたらにはやりけり

三寒は籠り四温は日向ぼこ

岸和田市 内藤きさ子

好きというよりは家計に合わず鯖

百円ほどの水仙が咲く庭をもち

その笑顔敵にまわせばこわい人

大根から見れば人參キザな奴

岡山県 浜野奇童

鎌の手をふと止めさせた春の草

倅せな頃神さんはほつとかれ

父ちゃん洗濯している緩り方

鯉のほり坊やはちつとも振り向かず

明石市 家沢薺花

新入社第一報が孫から来

雪山もいつしよに春のベール着る

旅帰りひろげたままで旅話

凧よりも上で一服喫う峠

愛燃焼ただ沈黙の夜となる

岡山県 長谷川 紫光

あつさりと離婚すすめて相談欄

泣く膝があり俸せな夜である

スト妥結バス凱旋の顔でくる

高槻市 若柳 潮花

死にますと云うてた女が生きてはる

遺児ひとり遺影へ向いて座したきり

眼帯の底思ひ出が見えるだけ

附添えもベッドへ掛ける程に癒え

豊中市 戸田 古方

かばうだけかばうて暴露しようなり

立読みで家庭医典を見てかえり

切花のいのちへ水を差し加え

ポットの湯やめめ暮しをふと思ふ

豊中市 寺田 花宵

一生の運を整形外科に賭け

喫茶店春夏秋冬の長さ

マダムとも呼ばれて小鳥ほど動き

叱られた娘返事のあらたまり

新居浜市 安藤 桂仙

気もめさす話持ちこむ里帰り

危なけりやよけて行けよとすぐまれる

レントゲンに息を止めてる晒首

魚市の蛸は必死と箱を抱き

京都市 室井 八九寸

ひな壇に明治百年新しく

タイミング満点春へ酒値上げ

ヘルメットの黄を背にクルマ矢のごとし

妻をしのぶ

すぐに後への口癖が先へ逝き

諫早市 川岡 靈眼子

三面鏡三ツ腹立つ顔写し

抜けて来る髪一筋を惜しむ吾

合宿の夜干しのシャツが手をつなぐ

病人を見舞う高さに菊匂う

芦屋市 松下 たつみ

制服を見せに行きたいとこがあり

タイミング無口な人を笑わせる

又一人増えた女の立ち話

託児所に預け職場の顔となり

大阪市 石倉 旅風

風吹けば吹いたで寂し風の音

母からの一字も無駄の無い便り

古稀ちかく世故には疎く楷書かく  
達筆な変態仮名は勘で読み

ハワイ 築山快夢起

名刺見てハハンと気づく袖の下

表彰をされて古疵いたみだし

クレヨン画烟りは汽車より太く描き

ともかくも話題の人となつて逝き

大阪市 不二田一三夫

七五三青い目もいてほほえまし

寄席(三句)

拍手待つそのゼスチュアへ乗つてこそ

笑つてるのは高座の二人だけ

借金を逃げて笑いに來てる寄席

出雲市 尼 緑之助

総選挙申上げたいこと尚失せず

トラツクの豚は仲よく餌へ寄り

事なかれ主義へ団地が押し寄せる

尼崎市 長谷川三司

A氏の病床を訪いて

マツチ擦る中氣へライター付けて出し

匙で喰う匙は茶碗に触れて鳴る

慰めの言葉は云わず嘘になる

宝塚市 黒川紫香

旅一人酔うほど酒に親しめず

とほとほと戻れば犬がついて来る

二三軒つづぬけにして御用聞き

奈良県 麻生アート

千坪の話 話と聞いて置き

税務署を出れば柳が青かつた

春の陽ざし猫ちぐはぐに居て和ごみ

京都府 大鶴喜由

退いたとて無用の人になるまいぞ

たつた一言過ぎて誠意がパーになり

広く浅く知つてるだけで間に合わず

門真市 福島鉄児

思い出す程の女でなかりけり

がめつく生きる女に身寄りなし

独身で通す女にある小皺

岡山県 直原七面山

恋人の影踏まぬよう気を使い

酔わぬかな月が二つに見えるまで

かぶりついて見たい女の円い膝

防府市 弘津柳慶

隠し芸御苦労さんと酌いでくれ

朝刊をかかえて焚火の輪に交り

同窓の渾名で記憶たどり出し

大阪市 大坂 形水

待ちわびた家に生れた幸運児  
愛情に飢えて少年罪に哭き

大阪市 水谷 竹 荘

句を想いつつの階段踏み外し  
寝る前の一つぱいというクセがつき  
宗教におどしがあつて抜けられぬ

倉敷市 本田 恵 二 朗

車掌の名おぼえて降りるターミナル  
委任状つまんで代理立ちあがり  
不渡りを出しててまでも飲みに行き

大阪市 山川 阿 茶

お遍路を蝶が追つてる春霞  
力一杯つかんでみたら雲だつた  
なんとなく出来たルールで平和です

岡山市 服部 十九 平

お河童の高二お七のように燃え  
恋の家出四人の親が青くなり  
体重が十疋ちがう得点差

大阪市 西 出 一 栄

万才へ興奮しないのも混り  
じつとしておれぬ年寄にも困り  
噂もうただの噂ですまされず

島根県 藤 井 明 朗

名目はまことしやかにへそくられ  
歌舞伎座にて(二句)  
幕の内残つたままでブザーに立ち

西宮市 若 林 草 右

へそくりの事は計算忘れてた  
花の宴不酔なマイク呼びかける  
いくつかの恋を結んで散る桜

藤井寺市 西 い わ を

ボーナスがないのに銀行やつて来る  
堂々と休診学会では飲む話  
春斗の呼ぶ春一番に芽がふくれ

大阪市 市場 没 食 子

春麗らコンクリートさえふくらむに  
鉄筋の横はぬかるむ住宅地  
人間は恐いと雀なつかない

岡山县 田 村 藤 波

大学へゆかぬと長男言うてくれ

大阪に嘔りついて世に遅れ  
公害に雀も都市に見切りつけ

建国記念日

理窟など抜きで二月は良い休み

名古屋市長 吉田水車

五体満足何の不服ぞ

3DKお雛さまには相済まず

情けなや入れ歯外してガムをかみ

ハワイ 羽佐間柳葉

都会では食えず田舎で法螺を吹き

金語り不本意乍ら馴れてます

文化器具ずらりと列べ貸家に居

高石市 谷沢好祐

方角のせいにし医者を変えて見る

物持つて行かねば口先だけになり

直球は駄目だカーブで行くとする

岡山県 池田古心

雨洩りはしても借屋でない誇り

是れも見栄椎の大木家根を蔽う

かくれんぼ恋の芽生えが抱き合い

倉吉市 奥谷弘朗

山男今日うぐいすに聞きほれる

月給をみな取り上げる内助にて

一目見て代理と解る肩の中

京都市 都倉求女

予報など気にせずかつきり春は来る

春をのぞきに屋上へ出る昼休み

畏友栄転

風も春大きく新しい陽へ船出

奈良県 西辻竹青

最低生活なんてピースで座り込み

芸者にも礼まで言うて妻気嫌

百万やそこらで不渡り出せるかい

倉敷市 野田素身郎

うまそうな鯛泳いでる水族館

僕かて男ミニスカートに目が移り

義理で来た見送り発車が待ち遠し

大阪市 今西章雅

ホイホイホイまたしくじつたなと煙草

アベックで拝む若さがねたましい

還暦へ喜寿が預けた遺言状

芦屋市 丸川初甫

早春へわが足音を高くする

腹の底は競走相手で酌み交し

予備知識精々聞いてハネムーン

大阪市 金井文秋

無理せんでええとごますりあしらわれ

若さとは悔多かりし勇み足

欲が出てからはおけいこ手が進み

神戸市 仲

どんたく

本人にまかせておけば嫁きおくれ

そろばんが孫へ電車になつてやり

欠点がちよつびり胡椒の役もして

竹原市

山内 静水

あんた男でしようとおんな

光るものみな光らせて妻の留守

苦労性アンテナみたいな耳をもち

大阪市

吾郷 玲人

悪友が居て青春に悔がなし

エプロンを付けると猫も起ち上り

着倒れの京に古着がブラ下り

加賀市

那谷 光郎

旅発つた冥土へ勲章追つかける

世間態があります贈答くり返し

アルミ貨の軽さは賽銭にもならず

熊本県

有働 芳仙

もう一度振り向くだろう曲り角

停電へオール電化のあわてよう

出直しの人生たかが知れており

鳥取市

森本法泉水

これしきの客に昼飯食いそびれ

不渡りを出したその夜は先ず眠り

横綱が負けたところで腰をあげ

笠岡市

木山 遠二

気の早いところがかわいい露のとう

博士号序でのように二つ持ち

酔うた時ぐらいはせめて胸を張り

大阪市

福井野 迷路

耳遠し長生きするせと云うてるらし

人口過剰わからないのは人不足

インフレの段階金持ちの幻想

宇部市

平田 実男

女世帯噂の中で新築し

鏡合を自己満足の顔で閉じ

初恋の顔が浮かんだ倦怠期

岡山市

江国 幽谷

オモチヤより孫金植を貸せと云う

運動のために作つた葱の出来

春の日へ道ふくらんだように見え

今治市

越智 一水

わら屋根がうけとめている落椿  
新学期風も嬉れしいものうち  
春ですともぐらの道がもり上り

愛媛県 渡辺 曉 童

鹿兒島にて (二句)

歓迎の花火に代えて噴火する  
噴煙をまともにすする夜泣きそば

自我没却も割前の高

大阪市 本多 柳 志

目出度い日猫も目出度いものを喰い

ぬすみ酒舩如きにおどかさ

会う笑顔別れる笑顔ターミナル

美禰市 安平次 弘道

首切られ料へ銀行がワンサと来

特価品傷を見つけてまだ値切り

豆の芽が観察日記と共に伸び

奈良県 木村 十 悟

わら掴むつもりのおみくじまでも凶

もう妬いて呉れない妻がいとおしく

凍て付いて居るのかしろい屋の月

倉敷市 水 粉 千 翁

袋掛け人手の足りぬ桃が咲き

足取りに歌あり戻る日暮れ道  
別れねばならない義理の背がまるい

大阪市 川口 弘 生

金出来ぬ手相と本に見えてあり

自信ないカメラは絵葉書買つて来る

かざす手が絵になつてゐる舞姿

笠岡市 木山 要 次

口応え所詮は妻と云う女

食べものを母に合わせて孝の端

八十五どこまで縮む母の丈

鳥取県 森田 布 堂

ひな飾る手に摘草の香が残り

みかんむくまでをすつばい顔で待ち

大砂丘ライフルマンが出て来そう

泉大津市 高津 徹 也

春の蛟を打ちてしばらく湯ざめける

独身の裏の雨戸をしめたのみ

夕虹へしおりをはさみ書を休む

八代市 永松 道 雄

おかアさま叱る祖父さま祖母叱かり

うつろな瞳ぼんやり沈む文机

雌鳥の卵抱くようにあなか抱き

宝塚市 小島無聖

スモッグに煙つていても恋の街

書いて消し消しては破り偽れず

満月が縮んで見えた欠伸する

枚方市 宮川珠笑

ドラマならここで彼女の手を握る

うぬぼれがあつてしきりに腹が立ち

予定日へ時限爆弾めく産婦

東大阪市 久米奈良子

納得の心がまたもうずき出し

布団干す力ようやく我がものに

石峰寺にて

冬の陽へ五百羅漢の泣き笑い

岸和田市 植山武助

苦い酒思い出させる服のシミ

倦怠期あの斗病の内に過ぎ

三味を持つ手に庖丁のままならず

香川県 三井酔夢

正直の頭に重税のしかかり

倒産の巻添え涙信じ過ぎ

あざやかに手玉にとられ裏切られ

姫路市 隠岐不酔

無理をして買うてやつたにしまいこみ

好きなもの何んでもやれと見離なされ

税務署で泣いたが鬼は笑つてた

岡山県 藤原秋月

里からの見栄と一緒に鯉のぼり

禁酒もう解禁にする花が咲き

六三三滅私奉公など知らず

善通寺市 岡田拳法

泣きたくなると「男なら」を歌うなり

手術を前にして(二句)

なんとなくそくそく手術迫るなり

退院日描きバツサリ切られよう

大阪市 天正千梢

一昼夜堪えた術後の水の味

貧乏丸出しの作文賞に入り

子等寄つて胎児の名前つけてくれ

堺市 高崎雄声

落選も経歴の中に入れて売り

中年の魅力と服の身だしなみ

強い歯ですなと医者ほめて抜き

奈良市 宮口笛生

どじよう一匹住まぬ小川をさみしがり

生酔いの愚かさ思う終電車

ビニールの中に春あり莓咲く

熊本市 楠田英子

胃酸過多ですと猫病名をもらつてき

重い方をだまつてさげる子を見上げ

生れて死んでそんな事思う年になり

出雲市 中川晃男

つけの利く顔へ何時もの見つくろい

わきまえてまた押す老いの横車

人不信花へ素直に向く心

大阪市 宮地双楽

上げしおへ押しの一と腹をきめ

松並木枯れて淋しく名をとどめ

一周忌妻の仕ぐさがよみがえり

松江市 柳楽鶴丸

頑固一徹駄目駄目駄目

女房に甘えて見たいと思う日も

一円玉貯めて二泊の旅に出る

新居浜市 小林孝正

子の入試パスの日値切らず鯛を買う

抜擢をされて気まずい日が続き

何を話すかアベック影まで倅せそう

守口市 羽原静歩

はるかなる郷愁門衛のラツパ鳴り

初球から打つてスカウト注目し

コンベアに乗る人生のふとわびし

鳥取市 藤本礎山

人生の永きへ無駄な日在つた幸

天国で添うわと母をあわてさせ

向き合つた団地の窓に見栄を干し

奈良県 草深醉升

友の新築祝し

新築の柱を撫でてほめそやし

公約は聴いてた方の聞き違い

よその木に負けるな庭木に肥をやり

尼崎市 岡本昭三

記念樹に都会の月の冷めたすぎ

気がついてるストツキングのゆるみ

ヘルメツトかぶつたままま昼の飯

大阪市 西川誓二

交通マヒ交通至便を嘘にする

痼癥を親父墓まで持つてゆき

それとなくお前が好きやと云うポーズ

新居浜市 近藤凡生

何に想うカモメが一羽磯で待ち

焦る気の前にみの虫ぶら下り

すきま風聞くな淋しい僕の愚痴

大阪市 中川 滋 雀

意味深な目だと別れてから気付き  
丹精をこめて枯木にしてしま  
気を使うて呉れなと時分どきに来る

出雲市 原 独 仙

番犬と散歩の間へ押し入られ  
賛否共理由なきまま建日

とも角も日の丸立てた気の和み

大阪市 児島与呂志

春そこに来たのに手相の灯をたより  
妻の背を搔いて大きいなと思  
成績表教育ママがお待ちかね

大阪市 室谷 鉄 舟

ストーブへ皆夫々の故郷自慢

病める子のせめて視界へ鯉のぼり

母死亡二ヵ月目

花便り故郷の母からもうこない

富田林市 浅川 八 郎

歳七十神の試練依然低迷  
一人居る孤独窓を開ける

看護婦さんもやつぱり昭和つ子

大阪市 森 本 良 夫

大阪も負けてはおれぬ雪が降る

子の任官を祝う

うれしさをむき出しにして酔っている  
盃をほす仕草まで頼もしく

高槻市 山田 季 賛

上役のひとり言へ気がかかり  
晩酌が明日のプランを狂わせる  
よくよくの話へ妻は取り合わず

下関市 桜川 不 水

寝てばかりいてみの虫は飯が食え  
頬冠りでチョイと出ました土筆んぼ

竹原市 杉原 愛 鳩

遠縁は伯父の年忌で初対面  
のりかえた株もどうやら買いかぶり

玉野市 小谷 仙 山

春一番指がのぞいている軍手  
晴姿逆さに池の鯉がはね

平田市 久家代 仕 男

風除けをはずせば匂う梅の風  
いつそみな抜けと歯科医は軽く言う

呉市 林野 甦 光

不言実行したのが課長気に入らず  
六十年おんなじ山を見て飽きず

岡山県 大森 娛句楽

これまでの恩を就職して感じ  
花麦の穂が店頭で春を告げ

兵庫県 遠山 可住

入学式祝辞通りに咲いて来ず  
赤旗がだらりと下り倒産す

加賀市 梅田 久雄

今日も釣寒鮒桶でやせほそり  
冬越した金魚慈愛の目でながめ

加賀市 木村 一路

陽溜りに鍵つ子一人忘れられ  
からからと笑えば女絵にならず

兵庫県 河原 みのる

三寒四温脱いだり着たりのせわしなさ  
検討したい検討します御ん視察

兵庫県 大江 秋月

マージャンの座で動かしている人事  
栄転の任地は雲も美しい

笠岡市 松本 忠三

地図通りに行けば只今工事中  
四季の花ごつちやに活けて事務机

鳥取県 渡辺 乱坊

高松の雪はぬくそうにチラホラと降り

度忘れにそれぞれ推理働かせ

京都市 松川 杜的

花便りにも定年の指を折り  
春の陽が光つて水車は一人ぼち

岡山県 横山 一声

ダイヤはめて来たに気づいてはくれず  
春日和金とひまとがままならず

鳥取県 清水 一保

家柄をほめて人格にはふれず  
議場より先に舞台裏が荒れ

大阪府 神谷 凡九郎

弱肉強食そう思いたくない浮世  
忠実に自分に生きてうとまれる

富田林市 川端 東雲楼

夢と夢こうも二人は違うもの  
雑草よことしもやるか根くらべ

大阪市 河井 庸佑

むこうから思わくはずすように出来  
耳打ちで遊ぶ話はすぐまとめ

小松市 馬場 魚山

ける石もなく通学の行き帰り  
石ブームなるほど石の美しさ

福井市 大山 雅城

バスガイド一人で喋り一人で唄い

霧深く前車が霧を分けて行き

大阪市 宮尾 あいき

お見合の母親同士うまが合い

淋しさに泣いてテレビで又泣いて

東大阪市 本多 清人

ラツシユアワー歯の痛いのは俺だけか

八時間稼ぎに行くのに手を振られ

和歌山市 土谷 城石

口笛でちやんと二階の娘に合図

二階からひき戻された芋屋台

ホノルル 加川 カロ女

孫にまず打診をさせて家に入り

常夏のハワイに明治は強く生き

倉敷市 井上 旭峯

小説になる生立ちを酒に聞き

人憎む心を捨てた女の瞳

松江市 岡崎 祥月

ホステスのサービスもよし標準語

春うらら人 人のつづく道

和歌山市 野村 太茂津

淋しさも詩の香りある倅よ

禁煙と断酒が変人に見え

和歌山市 西尾 公作

優等生になればなつたで母の愚痴

吊り皮に軽い生命がゆさぶられ

大阪市 福井多蘭子

申訳なし生きて戦功讃えられ

あの戦友が死んだ日も雨今日も雨

和歌山市 二越 俊爾

お迎えを待つばかりですと医者通い

忘れたを今日忙しくてと妻は逃げ

富田林市 岩田 みよ

何時咲くか秘めた心に種子を蒔き

席蹴つて帰る勇気がほしい席

笠岡市 出原 真奇

息切れをしたのか保険屋来なくなり

卒業をもう一人前と思うとり

加賀市 細呂木 魯木

牛乳より酒の値上げがひびく家

ファツションショーおへそも化粧したらしい

京都府 清水谷 句楽坊

お釈迦でも生れた時は丸裸

降誕の釈迦に産着を参いらせん

泉佐野市 大江 睦夫

産声が宣まう今日から祖父さん

暖こうなつて気憊な風邪を引き

★

菊沢小松園

握られて握り返した頃が花

覗き窓の向こうに我が子の顔があり

粉雪降つて昔の日本の夜になり

声だけが壁に当つて跳ね返えり

採めてもめてもめて真実語られる

松江梅里

脱線したり衝突したり添うて四十年

子は自習パパは法規と構造と

打診したりされたり虚々実々

おつかない耳のつぶれた代理来る

螢の光聞いて代理はうとうとし

清水白柳

逃避する城ありそれがホームとは

匙に歯がふれて病人ほほえみぬ

素直になつては余命いくばくもなし

悼 中筋三幸氏嚴父

頼りきる大樹崩れし如き訣れ

川村好郎

よくもまあ不足ばかりを拾うひと

金追うていつか心も冷え切つて

甲斐性なしと云わんばかりの皮肉聞く

退院を祝う 二句

人生は長し札幌の空もよし

待ちわびたあるじも揃い新居春

北川春巢

妻が臥て日曜盆栽枯れかける

引越しが近いと知らず胤ふえ

梅田地下ガランとし過ぎ迷いかけ

男一匹病めば肌荒れ気にかかり

読まんならん本ばつかりへ桜咲く

西尾 栞

埴輪贈めて心のゆとりととのえん

まばたきもせず埴輪の笑みつづけ

モナリザも及ばぬ埴輪のこやかさ

イミテーションながら埴輪のあたたかく

現代人よ埴輪の顔をとり戻せ

若本多久志

申告へ税吏ご苦労さんと言ひ

十代へわかる話のむつかしさ

おごられる方が勘定気にしてる

老の坂(二句)

口笛が吹けたらなあと思ふ齡

ほどほどにしとくゆとりも齡と知り

# 川傍柳 初篇研究

(四十七)

前田喜代人 川端柳風  
 岡崎重義 高須啞三味  
 清博美 丸十府  
 藤井和雄 岡田甫

460 嫁の髪けふの内にハ出来る也

五 英

前田||「出来ぬなり」でなくて「出来るなり」である。髪結のはかどらぬことを皮肉っている句。姑が嫁に対しての悪口をよんだもの。平凡。

岡崎||贊。「嫁の髪已中の間にやつと出来」(二一・一)

清||贊。花嫁時代は何事をするにもていねいであり、またのろい。それが家事のベテランである姑には気に入らぬ。主題句も姑の存在が意識されている。「長い日も二つは出来ぬ嫁の髪」(二・八)

藤井||「今日の内には出来る」がこの句のミソ。したがってそれだけの句。

川端||贊。急ぎ立てることをあきらめたよくな皮肉。よくある風景だ。

高須||丹念な嫁の身じまいに、起きるとそのままタスキをかけて台所へ出る姑のア

イロニー。

丸||藤井説贊。「姑のアイロニー」ではなく、作者のである。

岡田||同。この句にはあまり姑女の存在は感じられぬ。

461 十九丁の繩を渡るおもしろさ

五 雷

前田||十九丁は、十八丁ともいい高輪のこと。芝田町の辺から品川までの海岸の称。品川の遊所で遊ぶ面白さの意。言葉だけで面白くない。「十八丁あなたへ僧の四ツ手なり」(二五・27)「高なわまでは釈尊のお弟子なり」(二四・13)

岡崎||芝の僧や薩摩屋敷の浅黄裏が、品川の飯盛女を買いに通う。

高須||高輪を歩くのを「繩を渡る」とい

い多少「あぶない橋を渡る」の意を含めているので、芝の坊主どもを言っていると見たい。

丸・岡田||贊。

462 石垣へくつ付きこめ餅をくひ

泉 河

前田||石垣はいしがき、いしがけともい京都四条大橋下流の加茂川西岸の茶屋町いわゆる石垣茶屋女がいて通行客を引込んだ。この句、茶屋女に、よびこまれた客が、こめ餅を食べているのを、「石垣へくつつき」とよんだもの。こめ餅は、米粒の砕けたものをまぜて作った餅。

清||石垣茶屋を詠んだ句と思われるものがどうも見あたらない。むしろ「石垣の向ふに」としま並んで(一八・22)という句からすれば、主題句も神田鎌倉河岸豊島島の白酒酒を詠んだものとも思われる。しかし、こめ餅(不明)があるため、その理由づけができない。

高須||「こめ餅」は「小米餅」で、砕け米で作った餅だから貧農の携帯食。した

がって食べる時も道ばたにしゃがんで食べる程度。そんな時、本能的に石垣があれば、それにくっついてしゃがむ。貧しい旅ゆきではないか。

丸 石垣といえは当時は直ちにあそこと断定されたものであろうが、私にはわからない。タル一八の句から豊島屋の近くで、野菜など行商の近郊の農夫が待機している場合(豊島屋は客多く、店先で結構野菜などの商売もできたという)あるいは石垣あたりに出没する街娼の状態を詠んだものか。いずれにしても不解。

岡田 娼婦のいた京都の石垣は、江戸の人は知らず。したがってここでは普通の石垣。どうもハッキリしない句だが、高須説が一番無難。

463 むらさき裾濃ぬぎ捨て女郎買

一 甫  
前田 裾濃は末濃とも書く染色の名。同色で上の方を薄く、裾の方をだんだん濃く染めだしたも。能などで主として、今でいう未成年が着た派手なものであった。一人前らしく見せるために、紫裾濃をぬぎ捨てて女郎買に行くという意である。坊主が医者、小士が町人風に、番頭が職人風にと着付けを飾って女郎屋に出かける支度の出来る宿が新宿にあったが、その宿は湯屋を兼ねていたということである。

清 前田氏は、「一人前らしく見せるために紫裾濃をぬぎ捨てて」と説明されている

がこの紫裾濃は、蹴鞠をするときの裾ではなからうか。蹴鞠から吉原への柳句も多数詠まれている。

藤井 女郎買に未成年とあなどられたくない若い者の気持ちだから礎稿に賛。この若者の初陣風景ではなからうか。

高須 清説の蹴鞠をぬいでであらう。派手な紫裾濃の蹴鞠袴をぬいでであらう。

丸 岡田 清・高須説賛。

464 白粉を掬して下女ハつけて居る

一 甫  
前田 掬しては、抄って(すくい)とつて)の意。色黒のお多福下女の化粧ぶりを出しただけ。「おしろいのあらうち見べいざまでなし」(九・28)

岡崎 賛。黒い顔、あばた面に壁塗り。

清 たっぷりつける必要がある。

藤井 掬してだから、片掌に一杯の白粉。したがって、たっぷり壁塗りの様子が

おかしく解される。掬してがミソの句。

高須 掬してとはむずかしくいったもの。当時の洒落ではなからうか? 「キクして」と正確にいわず「キツして」でよいのではないか。

丸 賛。「掬して」がこの句のミソ。したがってこれは正確に「キクして」と読むべきであろう。この語「温情掬すべし」など以外には、そうざらに使われない。漢文などにもあまり用例はないようだ。この語をまず思い付いて、この句をなしたように

も思われる。

岡田 「掬す」は漢文調。キツすとは読まず。当時のインテリぶった作者のねらいであり洒落である。水なども掬すという。藤井説のように掌一ぱいに……の意。

465 四手の稽古天王あたり迄かけ

魚 交

前田 四手の稽古は四手駕の稽古。天王は天竺の神、牛頭天王の略。江戸では千住小塚原、浅草蔵前、品川にあった。この四手駕、これらの天王のどれかまで走って稽古したのであろうが、いずれにしても遊里に近いところであらう。

岡崎 浅草天王社前の駕屋(川柳大辞典)としている。

清 吉原に近いということで、浅草の天王社であらう。

高須 柳雨翁は「江戸勤の新参弟子は、牛頭天王社(後の須賀神社)辺まで、石など乗せた駕をかついで、駆け方や掛け声や前棒後棒の息の合わせ方などを稽古しただらう」といっている。

丸 柳雨翁の説に従っている。蔵前の江戸勤から天王橋(後の須賀橋)あたりまではちょうどいい稽古の距離であったらう。

岡田 賛。「あのカゴは往ったり来たりしてるが何してるんだらう」「ありゃあカゴカキの稽古だ」という会話が、当時の洒落本の中にも出てくる。

## カミシモを着せるな

工藤甲吉

「わたしのうやまう、そしてやはりわたしのように、むずかしい字をよく知らない、わたしのもと居った半島の村の人たちの前にこの本をひとつあげます。」とかいた。(こうかいた時私は、このことはこそが、じっさい私の詩だ、いやじっさいのわたしだと思ったりした。口語作の短歌を試みはじめたのも、その村に於てであった。併しべつに唱道した訳ではない。その以前、藤村氏と花袋氏に、短歌を口語で作り度い旨を告げて、激励はされてあったが。)

これは同郷の口語歌人・鳴海要吉が、その口語歌集「土にかえれ」にかいているあと書きの一節である。要吉の口語作創案は明治四十一年。私は昭和の初め、この人から口語歌を習い、かたわら川柳もやった。そのころ私と同じ二刀流つかいはほかに三、四人いた。それがやがていずれも申し合わせたかの

ごとく口語歌をやめ、川柳一本になってしまったが、口語の歌と口語の川柳は、何か兄弟のような、切っても切れないつながりをもっているようである。

さて川柳は「口語か文語か」について、実は私は、こんにち、なお、川柳にこんな問題が残っていたとは——とあらためてびっくりした。というのは、私は、川柳というものは元来、口語体を用いるのが原則(特殊な場合は別)と最初から思っていたし、それでいっとうにさしつかえることもなかったので「口語か文語か」については、これまで一度も考えてみたことがなかった。したがって慢然もいとところだが、しかし、川柳はいうまでもなく民衆俚楽の詩である。とすれば冒頭の要吉のことはどうり川柳はやはり口語であるべきではないだろうか。口語は要吉のいう「わたしのうやまう、そしてやはりわたしのよう

に、むずかしい字を知らない」者にも作れるし、また、よくわかる。それにこんにちには新聞の死亡広告までが口語体の時代である。わかりやすいということ、つまり口語は過去——現在——将来と川柳の発展につながる重要な要素の一つとも思われるのである。

要吉の歌ではないが、同じ口語の啄木の歌について、評論家の兼常清佐氏はその著「美しき言葉の情熱」の中で次のようにいっている。「啄木の歌の、他の大きな特色は、その歌が私共の毎日使った生きた話言葉に近いことである。このことがおそらく啄木の歌の一番大きな特色であろう。まず彼は動詞を話言葉に近くまげている。(中略)次に彼の試みたことは、話言葉と同じようにテニハを入れることである。「喉がかわき」とか「日が赤々」とかいうようなテニハは、文章語にはあまり使わないもので、殊に歌にはほとんど使わない。また「朝から晩まで」とか「よく似た声かな」とかいうようにテニハより外の話言葉も使った」と。これは川柳にもそっくりあてはまることである。

啄木の歌の口語、川柳の口語。川柳が啄木の歌に近いのか、それとも啄木の歌が川柳に近いのかについては、いまここでとやかく言わない。また啄木の歌がそうだからというのではないが、啄木の歌の特色は同時に川柳の

特色でもあると思う。ゆえに川柳が口語でよいとする理由の一つに取り上げたまでである。

最後に

銀婚はオイコラハイになっていた

川柳の姿はこれでよいのではないか。なに

## 口語の原則とT P O

早川清生

も無理してカミシモを着せる必要などなからう。また文語だから上品、口語だから下品というものでもない。第一文語などいずれば相手にされなくなるのではないか。川柳がみんなから愛誦されるためにも私は「口語」をよしとするものである。

×

句性を獲得したのに対し、前句附の附句から出発した川柳が、生活をうたうために、口語的発想を得て川柳味を築いてきたことによる。

もともと口語とは日常の談話に用いる言語であり、もっぱら記録に用いる言語が文語である。しかし明治文学が言文一致をなしたけた功績に俟つまでもなく、文語はわれわれの周囲から事実上消滅した。話し言葉から分化発展した文章語としての口語が、かつて文語が占めていた文章での地位を独占してい

る。川柳に用いられる口語も主にこれで、川柳は柳多留以来ひとすじに口語表現を追究してきたといえる。現代を詠い人生を批判するために、原則的に理智的な構成をもつ現代の口語によらねばならない。以下作例はすべて路郎師の作品によった。

公報をまだ信じない信じない  
信心で来たのへ桜真っ盛り

疑いもなく 今夜も眠りにおちる

これに反して口語の本態であるべき談話語が、川柳に用いられるのはきわめて稀で、むしろ十七音字の一部に用いられる方が多い。

これは談話語がとかく冗長で、短詩型になじみにくいことに起因している。

僕は医者でも糞すべでもありません

君・君・憂鬱を配ってあるくのは止せよ

桜かねと落ちついてゐる年になり

しかし適切に用いられたときは情景を活写したり、人物の性格や環境を再現するに妙である。

一方文語はリズム感のある緊迫感をもつので、内在するものが強い語調を求めるときに用いるのに適している。俳句における革新的な一部が屈折感や断絶感を犠牲にしてまで口語化をめざすのに対し、川柳の中の考える人たちが文語定型の重厚さに魅せられているのは、新しい方向を見出すための模索と、伝統に対する反撥からでもあらうが、文語を優位

としても、川柳を完全に文語化しようとするのではあるまい。もちろん従来から文語の特徴を川柳にとり入れることはしばしば行なわれており、

妻や待たむ靴音を高めんか

人類は悲しからずや左派と右派

ああ僕も汽車を下りしにゆくところなし

こうした文語の圧縮した力強さやはぎれのよさは、捨てることのできないものである。

文語を主体とする俳句は、切字の関係もあって句の調子を切断または飛躍させ、川柳は口語であるから、連続したりズムを構成するといわれる。文語も時代とともに変遷の歴史をつづっており、現在においては純正な文語がもはや存在しないか、あるいはこれを駆使できる作家をみない。新かなづかいの普及は文語の衰退を決定的なものにするであろう。新聞の見出しが簡潔さのゆえにまだ文語に未練を残しているように、文語の短かさが往々定型に内容を詰めこむ道具に使われていたり、不用意な混用誤用があるとすれば論外で、文語と口語が入りまじった句に時としてこうした例をみるが、そうでなくとも文語はその歴史からくる重苦しいものを背負い、あるいは非論理的な情感をもって、物事の本質にせまることを妨げたり、言葉自体の迫力に酔わせることがあって十分な注意が必要であ

る。

川柳はあくまで口語短詩であるべきだと信じているが、自らをせまいところに限定する潔癖さは排せられるべきで、口語の中へ無意識にとり入れられた文語が口語をゆたかにし

## 新しい芽を

母ちゃんが化粧をとってふけたなあ

お駄賃を先にもらってお手伝い

口でなら男の子にも勝って来る

イスがない母ちゃんのひざにすわれます

川柳塔三月号の各地柳壇から抽出した「たけはら川柳会」と「ふじかけ短詩睦会」のそれぞれ小中学生の作品である。全部が全部卒直な口語川柳である。

文語の風格ある文体、例えば優雅なみやびや深い余情をまろやかに表現出来るなど、文語の長所を知り尽くして口語川柳を作るのと、それを知らないでいて作るのでは大変な違いがある。また、口語の、平言俗語の

ていることもあり、その回生のためには口語的把握をこえた新たなリズムと精神の創造開拓が必要である。そのとき当然文語のもつ特性を吸収し口語の中へ再現してゆかねばならないであろう。

## 橘 高 薫 風

魅力をよく存じていながら、なお文語川柳を作り続けている作家がある。これは、俳優に役柄の適不適があるように川柳に於ても、「にん」の問題であるらしい。

今ここに私は偉大な先輩豆秋さんと日車さんの句を引用して、口語的発想、文語的発想について述べようと思う。

骨立てたまま二次会へついで行き

降りる客いとんのんと続くなり

阿呆なこと云うてもうて淋しけれ

院長があかん言つてる独逸語で

ちちははにめぐりあいたや靴みがく

豆秋さんのこれらの句の半数は文語体なの

だが、発想的には口語の句ばかりと云えよう。仮りに表現に文語を用いたのは、文語の効用を作者がよく存知していたからで、句の根本的なものであるところの発想は、「豆秋の口語的発想」が総てに息づいていて、だからこれら一連の句に異質のものを少しでも感じとれないのである。豆秋さんが個人的な作家だというのは、ユーモアということばかりではなく、むしろ一般常識的作品の物見方とはほんの少しずれた観察を何に対しても鋭くゆきとどかせていることと、この口語体的、庶民的発想、表現に由来してのことだと思われる。

思わじと椿の花を火に焙べて

酒すこし飲めば淋しくなるものか

夜具を敷くことも此の世の果てに似つ

飯ほどわたしを理性にしたものはない

鍋釜それぞれ尻を据えて

屑籠 屑籠 また転任だとき

このように日車さんのは、口語体の句にもおのずから文語的構えが内在しているのである。句の風格、余韻には独自のものがあり、これらと思うと文語の研鑽をなおざりには出来ないようだ。

さて、口語文語の川柳の可否を云々するのは難しい。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

路郎

文語川柳はすばらしい。

お月さん残念ながら敗けました 豆秋

口語川柳も負けず劣らずすばらしい。

ところで、昔がこうであったから、今がこうだからとかで、これからの川柳を律する訳にはゆかない。川柳は自由だ。各人が各自の個性を活かして創作し続けているうちに滔々と流れる大河のように少しづつ変遷して行くものなのだろう。

異教徒の猛き犬飼う切支丹村

踏絵再び青年の掌に赤き旗

若いクリスチャンの林夢虹君は、川柳雑誌

時代次のような句も創作した。

魂を掌にとれば じゃが薯土にまみれて

## 口語か文語か

## 服部十九平

朝が来たよと雀が鳴くが二人は死んでいた  
新しい口語川柳に意欲を燃やし、やや高度の句境にまで達したかと思われて大いに期待をしていたのだが、尻すばみになってしまった、今では川柳塔欄にも句が見られなくなりました。同君の今後の奮起をうながすとともに、川柳塔誌に、新しい芽を伸ばす土壌を培う努力が切実に欲しいと思う。川柳は内容、型ともども、じっと止まっていけないのだということ、殊に選者は再認識して戴きたい。それが、直ちに小中学生作家への意欲につながる、ひいては川柳発展への僅かな希望に続くものであるのだから。

俳句は文語、川柳は口語とズバリ言い切る人もあり、「川柳とは人間生活の種々相を平言俗語で表現した短詩型文学である」と定義づけている人もある、併し口語俳句もあり、

川柳でも文語が使われてもいる、俳句は花鳥風詠のお上品ごとであり、川柳は人間臭紛々たる庶民詩であるからその用語も文語となり口語となつたのであろう、川柳が前句附から

はじめり前句には「まよい社すれく」等のように文語が使われたが附句の多くは口語が作られた、それは作者の多くが庶民であったので平言俗語が使われたのであろう。

ところで川柳必ずしも口語でないことは前述の通りであるが、口語川柳、文語川柳の可否について考えてみるのにこれは一概に言い切る訳にはゆくまい、口語川柳にも文語川柳にも各々長所短所がある。併し何と言っても川柳は口語が本態であるが文語にして句の格調を高めたり、直截にして嚴肅、莊重にしたり、句意を強化したりするのに役立たせる場合も屢々である。

人形を作る技に長け肺癒えず

誰か口火を切るものぞ

天地聞け我にベターハーフあり

何れも私の旧作であるが殊更に文語にしようとして作句したのではなく句意を明快直截に強調しようとしての推敲が文語にしてしまったのである、

路郎師は口語、文語の他に「話し言葉の句」というのを説かれている。即ち会話に用いる言葉で表現した句のことである。

葬式で会いほろいことおまへんか 豆秋  
お千代さん綱がひろくば泊まろうか

古句  
さうどずかさうやおへんに乗りすこし

汀果

麻生 葭乃

・ 近 詠 ・

神々も 照覧あれと地味に生く  
ウオツチの音あちこちでする机  
枝ばっかりの桜へ小糟雪が舞う  
誘う水あれば流れる禁酒にて

亜鈍氏を思う

ミルトンの跡ふむ人へ降るひざし

今月のアンコール句

(生々庵)

託児所に預け職場の顔となり たつみ  
春一番指がのそいている軍手 仙山  
しらゆきを冠り童話の街となる 甲吉  
かくれんぼ恋の芽生えが抱き合い 古心  
山男今日うぐいすに聞きほれる 弘朗

# 盲目抄

## 高鷲 亜鈍

盲人と聾啞者と肢体障害者の三つの部に分けて、それを一括した身体障害者協会があるが、いずれも不自由で、気の毒な人達である。しかしそのうちでも盲人がいちばん不幸な身障者だと思ふ。人間の知慧なんてものは、耳で聞いたぐらいでは到底頭にきざみつけられない。「百聞は一見に如かず」と。一目惚れも出来ず、目が口程にももの云えない死眼の私は、聖書でも許している目には目を、齒には齒をもってむくいるファイトも出ない。視力のあつた過去の反省として、私は確かに目を粗末にしてきた。云いかえたら良くないもの許りを見てきたようである。それがために盲人になつても、座頭市のような悪知慧ばかりが頭の中を馳けめぐる。塙保巳一のような偉い学者になれなくとも路郎先生の言う命ある句に取組んで、私なりの詩川柳が世に出たららもって瞑すべきだ。

道化ぶつて声する方へボール投げ

壁柱手摺をつかみ梯子段

失明を前提にした句の吟味

りんどうの花きづかずに失明す

バラバラに子ら育つてくかけの親

神ともにいます人にも手合わし

月にさえ側杖くわす新兵器

あの人この人祈る気持で思い出し

悔痕が陰の裏に焙りてる

果しなくめんないちどりの鬼にされ

盲人のけいこ頭突きもその一つ

四国のどこやら目に効く温泉ある話

思いも行いも交えずに信心してるとはいえず

覚えてるかぎりの顔が浮んでき

憎しみがますのは義理をたてるから

黄か赤か西瓜の色を聞いて食べ

いうがままにしてくれるヘルプ欲し

生ける屍吸殺は漁るけど

原水爆実験は月でせよ

仁丹も真珠も舌がよりわけける

トンネルをまだ抜け出ない六十路

色紙短冊  
書画用品

大坂我びし

丹ま月堂

を申マニニニ

# 酔蟹と冷飯

## 東野大八

と訣別したことを非常に勇氣のあるように自慢して書いているが、さきの民族的習慣の裏打ちで自慢しているわけである。日本人の冷飯食いをほめた彼は、彼自身、目下台湾で冷飯を食っているのは皮肉である。

中国展で、蘇州寒山寺の軸を売っていた。その黒い拓本をみていると蘇州の鮓(ふな)とカニの味を思いうかべた。

天下の食通袁子才は、寒ブナに限らず、フナと名のつくものは眼も鼻もなかったのが有名。私などは、イキな飲み屋が心得顔でフナの口取りなどをサービスしてくれるのだが、甚だ迷惑である。フナの骨がましいのは少々なことではない。焼いたなどは、破れ提灯でもつついているようで、まるで毛束料理だ。ところが蘇州のフナ料理は、奇妙にも焼いても煮ても骨がないのだ。どういうわけかと板場にきくと、毛抜きで骨を一本ずつとるのだときいたときはア然とした。

蘇州のフナといえば、連れ合いはカニである。南京や上海の居酒屋は、大きな酒ガメを四つ、五つ据え、その上にのせた分厚い板が酒卓である。スズや銅壺の重い酒が現われると、やおら片隅の酒の香の大皿に眼がいく。そこに折重った紅錆色の毛ガニの山は、もはや魅惑の泉である。しかし、カニ通となつてそんなものには手を出さない。生きた奴を選んで注文し、その蒸し上り待つのだ。

その選び方だが、それは眼玉と腹だ。眼玉は黒に限る。赤いのは禁物で中毒を起す。腹は白磁色に鮮やかに白いのがいい。こういう

名古屋市中開かれた中国展へ、前後三回も出かけた。タダで場内が好きだけウロつける特典を大いに活用したわけである。大陸放浪の成れの果てが、大陸の残香をハイエナのようにかき回っているという格好だが、遺憾ながら、人民中国の近代化ぶりの総ざらえなものだから、私の心をそせるようなものはない。ただ、銘酒茶香の類のみに余せんが保たれていた。

いま毎日新聞本社編集局長でおさまっている橋善守とよく北京前門街の、色街の飲み屋をうろついたが、彼はチャブスウを好み、私にもそれをすすめた。

日清戦争の談判で、日本へやってきてひどい目にあつた李鴻章は、日本の賠償金の金策に欧米へ借金旅行に出かけた。齡七十を越した彼は、歯が悪く、肉類はよう食べない。入歯の嫌いな彼は、歯ぐきでモノを食う厄介なにして食つた。これがチャブスウの初りで、

別名「李公雄碑(リーコンチャブスウ)」という。日本の横浜や三宮あたりでは、今もこいつを売っている。

李鴻章は、つねに暖食でないと気に入らなかつたが、対象的なのが蔣介石である。彼は「軍人は暖食すべからず、暖食すれば国を滅ぼす」というのが、台湾ごもりまでの彼の信条であつた。日本軍と交戦中、自軍の志気が落ちると、部下の將軍連を呼びつけ、陣中で暖食しているのだろう、と頭ごなしに叱りつけた。

山西事件ごろ、日本軍の強さは冷食にあると彼はがんにこ思い込んでいた。大体が中国人はナマモノは決して口にしない。水の悪い中国の風土からきたものだが、日本人が生卵を平気で食うのを厄病神をみるかのような眼つきで眺めていたものだ。

彼の伝記にこんなものがある。第一革命の時蔣介石はその革命に参加すべく、所属の連隊を辞去する際、酒の代りに冷水を用いて隊友

のは、清水に育った奴で、色が悪く斑点があるのは泥くさくて不浄なところで育った奴だ。

カニの腹あては、日本ではフンドシというがオスは腹ブタが三角、メスは丸い。中国ではこの腹ブタをへそという。中国ではメスが十月、オスが十一月がシユンで、それ以外はどっちもまずい。黄菊の咲くころのカニは、百味の会だと中国でいうのはこのシユンの事だ。

さてシユンのカニに合うのは老酒以外にないとは通はいう。紹興の酒に蘇州洋澄湖のカニといえど通中の通である。酒仙太白はこの蘇州のカニで白酒を飲み、酒友元籍から絶好されたという話がある。

カニといえば蘇州だけに限らない。上海は青蟹福建は海蟹があるが、中国のカニは河ガニが主力。醉蟹というのがある。酒漬のカニのことである。カニは醤油が好きで、それをたっぷりむと酔って眠ってしまう。そしてその眠りは永遠というわけで、動かなくなる。老酒を加える。そして四対六の醤油と酒の量で三カ月間カニに密閉する。出来上がったのをみると丸つきりカニの原型伍語である。オレもこういう酔蟹でこの世を終りたい、と若い私はよく友人にもらしたものだ。

上海の五馬路で、七つ道具でカニを食っている老人をみた。耳かきやら針金やら、ぜんまい様なもので、カニの体内から肉という肉を一片も余さずかき出して、せせり出して食べつくしているのに愕きもし、敬服もした。

孫文もカニが好きだった。食べる暇のないのをつねに嘆きながら、黄菊が咲くころになると上海の伊府麵を懐しがって生ツバをのんだ袁世凱や張作霖は、カニの臭を好かなかった。それで食べないのを、孫文は「カニを自ら料理して食べるようではなければ、中国の王道は成り立つかまい」と学生時代にワラったものだという。

何はさて、人民中国の昨今、果して誰がフナ料理を食い、カニ料理で舌ツツミを打っているであろうか。

## 女流作家は

### いつ作句するか

#### 池田あや子

ひとりひとり感銘する処があり、なかなかよい企画でございました。

ながら族、夜中の作句、灯を消してくらめでメモをしておくなど私もその通り、でもこの頃は夜より朝の方がよいことに気がきました。たのは、年をとったせいかなと思います。

阿茶さんの「売れ残ったのよ」と、お答えしましたら小沢さんが私の手をとって「男が阿呆に見えたか」とおっしゃった。というくだりは川柳家ならではの胡椒のきいた、いきのあった応答でございます。

小石さんの「私が女流作家などとはおこがましい限り、ただし男性でないことだけはたしか。」ユーモラスに真実をついた表現、思わず笑ってしまいました。

千柄さんの「分かん切った題でも一応は庶辞苑を引いて確かめる」川柳家の心構えを教えられます。

英子さんの「労基法の適用しない主婦業」それだからこそ、ながら族にもなるのだなと羨なさを開きました。

きさ子さんの「川柳を止めれば楽だろうな」同感ですが、川柳ガンを私は心得ています。一生つき合わねば仕方がございません。奈良子さんの「限りある命のゆらぎつづけるそのかそけき炎のハタと消ゆる日まで」

あいきさんの「私の命の続くかぎり」と燃えつづける柳魂に恐れをなしました。

みよさんの「どんな場合にも手帳とペン」を持業に、私も川柳病患者の一人である誇りに生きるものでございます。

女流作家のファイトは決して男性にも負けないものであると確信し意を強くしました。面白くよませていただきありがとうございます。

(よみうり川柳岡山版選者)

#### ・同人消息

▼浜野奇童氏(岡山県)は湯野中学校教頭として左記へ赴任された。新住所「岡山県川上郡備中町西油野、湯野中学校内

# 秀句鑑賞

前月号から

## 後藤梅志

雪だるま目はばっちりと色白で

(花村)

童謡風に詠い上げて、大らかでこせつかない良さがある。雪は降っても雪だるまを見ることは、まれな此頃ではあるが、笑いを含んだような、この句の良さは分かるのである。

作者は、かつての路郎門の逸材。この人の句を見なかつたのも久しいが、この句を前にして感慨無量である。「目はばっちりと色白で」何という余韻のある云いかただろうか。

「笑い」といものの在り方については、しばしば問題になるが、笑いを傷つけるものは多くはへたな技巧であるうかと思う。

机雑然枯れた一輪ざしは詩人

(薄子)

近作柳樽の末段にこんな句があった。途端にハッとしたが、嬉しくなった。

なにかはしらず雑然とした机上。枯れた一輪ざしは、水々しい花をつけた元の姿はなく

とも、心なしか、机上の主の思索をうながしている如くである。

詩心に灯をともし、ということばがあるが詩に芽生えた句として推称したい。聞けば作者は、一三夫さんの娘さんだそうだが、こんな句は、同人吟にあっても、見劣りがしない筈である。

琥珀色の湯呑の主は生字引

(菜)

コハク色と云えば、舶来物のウイスキーを思わせるが、これは、楽焼かなにかの湯呑に番茶が染みこんだものであろう。その湯呑の主は、会社でも古顔の、いまは囁託として余生を送って居る人でもあろうか。

もち馴れた、大きな湯呑だけを頼りに、淋しく生きて居る人もある。しかしこの人々は野心がない。愛すべく、しかも貴重な頭脳の持主だったと云う。琥珀色が、軽妙。

女子大の取り得一向見つからず

(野迷路)  
この句は「孫を見る」とそえ書があるが、そこを注意したい。

一般に、孫坊主や孫娘には、祖父の責任はないものだが、それでも可愛い味にはかわけていて、いやむしろチビの時代から目をかけていて、女子大を出る迄に生長はしたが、得心できぬものがある。女を失った女性。これは時代の変遷か、生物の進化か。学問はしたが、「女の取り得」はなくなった。元閣下である作者の巨眼に映るものはきびしい。この句は、一般にもあてはまりそうだ。

総選挙もとの木阿弥さんとなり

(日満)

佐藤内閣にはウンザリしていた。そこへ黒い霧が発生したり、議会のイザコザがあったりして、総選挙とはなかったが、結果は案にたがわず、社会党のへまもあって佐藤さんは座り込んでしまった。国民が騒ぎ立てただけ、拍子ぬけの形である。即ち元の木阿弥さんになってしまった。投票とはこんなことかと、作者は、つくづく苦笑しているのである。批評はせず元の木阿弥さんが面白い。

半坪の庭で結構土まみれ

(放人)

日当りはいいが、庭はないに等しい。そこへ工夫をして温室まがいのビニールを張り、便所のうしろへ、高山植物や、珍種の山つつじや、ベコニヤなどを育てて居る人がいる。

生来がママなたちで、ひまがあると一日なにかゴソゴソやっているが、植木や草花には、飽くことを知らない。

こんな人が私の知人に居るが、私はうらやましい人だと思つてゐる。

川柳を作るといふことも、けつきよく、こんな小さな労働をすることに、つながらぬものではないだろうか。

### 妻の目が子の目がみんな僕の目だ

(正朗)

戦首の人は、過去の敗戦の痛苦を背負いながら、雄々しくも生きてゐる。その日常は、察するに余りあるが、これには連れ添うひとや、子供達の努力を無視することができない。この人達は、たがいに感謝し合うということがなくは、一日も暮して行けない。その風景が、この句には力強く、かげ濃くやき付けられていて素晴らしい力作。

### ひとり身に馴れてサンマの焼き加減

(三司)

あぶらの乗ったサンマは、ぼうぼうサンマが燃えるほどの火力が入用である。一般の家庭では、煙りに恐れをなして、あまり喜ばないが、独り身の気楽さは、思う存分煙りも出し、頃合いのくるまで焼き、皿へとるが早いかサツと食べるといふ寸法だろう。サンマのシユンは秋だから、この句は季節外れのような気がするが、好きには季節外れはない。ひとり身の気安さがしのばれ、老巧の句。

### 患者風呂みな切腹の傷のあと

(旭峯)

入院患者が風呂に這入るのは、退院も近くもう風呂に這入つてもいいという許可が出てからだが、うれし自分のものだ。腹部を切開する大手術をしたのは自分だけと思いきや、来る人も来る人も、みな傷あとのある人達ばかりで、感慨深く眺めたのであらう。

太平の世の有難さは、みな切腹の傷あとを残して退院する。一寸した可笑し味である。

### コースターババが坊やへしがみつ

(どんたく)

ドリムランドへ行けば、大人も子供もスリルのあるコースターへは是非一度と乗りたがるが、あの上下動に廻転する速さには、胆を冷やすのである。用心棒のつもりで乗ったババが、思わず坊やにしがみつく場面も、ま見うける。子供の方は割合平気なのだが。外そ目には、若い恋人同士の方が、ほほえましいのではないだろうか。よくある風景である。

### マッチ摩る途端ライターつき出され

(忠三)

ライターはやりである。セールの人は、これが商売道具の一つになつてゐる。タバコの火は、切炭が一番うまい。次はマッチの火が、万辺なく火がまわりいいのだが親切にも、ガス臭いライターをつき出す。

テレビのコマーシャルと同様、相手が迷惑しても、サービスはサービスであるという当世流の解釈が巾を利かしているのであらう。句はよく、せつなな風景をとらえた。

### スポーツ紙にはさまれてゆく通勤車

(愛鳩)

スポーツ紙とは、むかしの赤新聞なのだがプロ野球全盛のいまは、堂々と大新聞が、おのおのスポーツ紙を子分に持っている。そのゴシップ記事を若い人達は通勤電車でむさばるように読んでゐる。こんなサラリーマン。これが新生ニッポンの風潮なのである。

右も左も、こんな人達ばかりがふれてゐる通勤車は、すこしコッケイな感じもする。作者も、スポーツ愛好者ではあらうが。

### 今日明日の相場次第で大根ひく

(公作)

昨今、消費地に近接した農家は、みな大規模になり、相場の高下に応じて、農作物を出荷する由。大根もそうであらうし、ミカン、イチゴは勿論であらう。

それにしても、此の句の「だいいこ引く」は着想が面白い。あだかも、蝸牛(かたつむり)が、触角を、雨上りに振り廻すのにも似て、一種の俳面を思わせた。さらりとした味で、諷刺を利かせた手並は凡手ではあるまい。さぞ高いいだいであらう。見落し易い句。

# 明智光秀(上)

## 富士野鞍馬

秀等をして安土を守らしめ、而して自ら近臣百余人をひきいて京師に入り、本能寺に館しぬ。信忠は弟の勝長と妙覚寺に館せり。」  
とあり、これは、徳川家康饗応の肴がくさっていたのを信長が怒ったともいわれている。それを川柳も  
御馳走が尽て光秀尻を喰ひ (七四三)

## 織田信長に仕える

明智十兵衛光秀は、信長より六才上、七ツ目といわれているから、大永八年(一五二八)戊子の生れと推定できる。

信長に仕えたのは、永祿九年(一五六六)三十九才の時である。それまでは浪人していたり、あちらこちらに仕えたりして、おしまいは越前の朝倉氏のところに居た。齋藤道三に鉄砲を習っていたともいわれ、信長に仕えてからは、いろいろ武功を立てていたが、信長は、光秀の陰性で小理屈をこねまわすのが、あんまり好きではなかったようである。それでも拔擢されて、江州坂本の城主となりさらに丹波の國を与えられ、龜山にも城を持つことになった。

## 信長の短氣

ある時、信長は、将士に酒を飲ませていた。光秀は下戸だから、その場から逃げようとした。信長は怒って光秀をつかまえて刀を抜いて「酒をのまないのならこの刀を飲め」

とつきつめた。それで無理に大杯の酒をのんだのであった。おまけに、光秀を抱えてその頭を叩き鼓の代りになるとからかった。それで光秀は、信長は自分を殺そうと思っていないかと感じたのである。

またある時、信長の寵臣森蘭丸の請いに、三年後には志賀郡を与えようといった。それを光秀は屏風の影できいて、志賀郡は今自分の領地である。自分は三年後には殺されるのかとも感じた。

「日本外史」には

「天正十年五月十五日、徳川公と穴山信良と入りて謝す。信長はこれ待つこと甚だ遅く、光秀をしてこれを饗せしめぬ。光秀は命を受けて、盛んに帳具を治め、周旋甚だ勤めたり。にわかにして出征の命あり。他人来りてこれに代れり。光秀大いにいかつて曰く「我れをして徒勞せしむ」と。悉く其の具を湖中に投じて去りぬ。ここにおいて遂に反心あり。而して信長はこれを覺らざるなり。すなわち津田益信及び蒲生賢

また、信長が蘭丸に命じて、光秀の眉間を鉄扇で打たせたということが、物語や芝居になつていて、川柳はそれを詠んでいる。  
人の手を借て信長腹をたて (拾五二)

蘭に打たれたが桔梗の遺恨也(二三三〇)  
光秀は扇のなりに箔をつけ (二二二)

つむりてんてんが十兵衛無念也(三二二)

先刻はなどと蘭丸次で言ひ (拾五二六)

明智が退出蘭丸をじろりぬめ(二三八三)

こういうことが重つて、遂に光秀謀反となつたと思われる。

光秀はふだんうぬ見ろうぬ見ろよ(四六)

ふたれちやあきかぬと寄せる本能寺 (一五三三)

そうして光秀は、中国征伐に向向している羽紫秀吉の軍に加わるよう命令をうけたのである。

愛宕山の連歌

## 愛宕山の連歌

中国へ出征の命をうけた光秀は、天正十年(一五八二)五月二十六日、安土を立てて坂本に立寄り、丹波の龜山城へ帰った。二十七

日には愛宕山へのぼって、愛宕神社に戦勝祈願をこめ、宗匠紹巴をつれて、社殿で連歌の会を催し、

時は今天が下知る五月哉 光秀

と発句した。それへ 行祐

水かさまざる庭の夏山 紹巴

花浮ぶ池の流れをせきとめて

と付けたのであった。この時すでに紹巴は、

光秀謀反の意中を、この発句で知っていたといわれている。

歌でふり連歌で曇る天が下(一〇四三)

—歌は小町の雨乞い—

おそろしい十七文字は愛宕也(二五二九)

愛宕からあそこだなアと本能寺(一一三三)

しししんちゅうの虫あたこからのぞき

(安七桜4)

紹巴の第三句については、

眉に皺寄せて紹巴は脇をつけ(三五三九)  
あめが下での宗匠と明智誓め(八九一八)  
天が下紹巴もすこし日和を見(四八二五)  
紹巴織質の流れもせきとめて(二二二二六)  
らん留がいいと紹巴へ明智言ひ(一一三二七)  
五月雨を流石紹巴はてで止る(四〇三)

などと川柳に詠まれている。

ところが後日紹巴は、秀吉の面前に呼び出

され、詰問をうけたが、

「せきとめて」に、暗に諷諷の心を籠め、

なお五七五の各二字目に「なげき」の三字

を折込みました。」

と答えて、疑いは晴れ、却ってほめられたと

いう話がある。それをまた、

申訳立って紹巴が五月晴(一一四二三二)

紹巴不運と御笑ひで事は済(一一四三〇)

五月雨に濡れぬは紹巴ばかり也(五七四)

と詠まれているが、一説には、紹巴後日を慮り、翌日愛宕山へのぼり、前日の懐紙の「せきとめて」の五字を削り、さらに同じくとめてと書き直しておいて、自分を憎む者が下五文字を削ったのでかき直したと申開きしたともいわれている。それで、

書かへてぬれ衣を着ぬ五月雨(二三八七)

けて又あめが下する五月とは(六拾八二七)

削るとは紹巴が知恵のかんな文字

(一一二七三)

とも詠まれ、本能寺の変について、

本能寺それでよめたと紹巴いい(宮三九)

本能寺紹巴横手をはたと打ち(一一二二九)

の句もある。

# 詠

# 近

大阪市 橋本 緑 雨  
雪とけの水にまじって流水  
厳しい冬でしたと彼岸まじが  
手形など一生知らず暮すなり

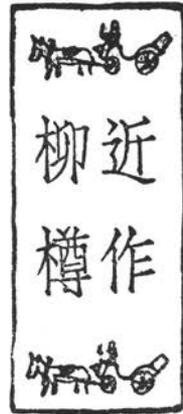
須坂市 高峰 柳 兎

職を去る佻しき職安へつなぎ  
宴酣けて床の間の下戸忘れられ  
酔どれを振り切り新婚旅行発ち

大洲市 米 沢 曉 明  
今乗って女早速編みはじめ  
見合の座目と目二人にさせて立ち  
浪人の目にも桜は咲いてくれ

松山市 月 原 宵 明

時計屋に十二時がきた驕がしき  
国立だ私立だ青春磨り減らし  
よい人であったとだけの仏さま



北川春巢選

松原市 谷 垣 史 好

海の広さへ人間石を投げたがり

乱雑だから居心地のよい書齋

ヒヨコの雄がこんなに安いとはシヨツク

義弟がガンで死去(二句)

不遇な一生葬式も雨になり

特等で焼いたお骨でこれかいな

竹原市 脇 本 政 己

お追従笑いの心は空つぽだ

怒りまた爆発しても殻の中

デンと家建てて余所者越して来る

飲み足らぬ酒でよかつた検問所

どことなし味が違うて匂(しゅん)のもの

愛知県 横 紫 光

妻の誕生日にも妻酒を出し

職業に貴賤はないとさげすまれ

まかしとけ云うてそれきり寄りつかず

両親を見おろし子供まだ甘え

荻野式長らく世話になりました

大阪市 小 谷 葉 子

エンゲージリングはずして今宵の職に出る

冷えきつた私になつて筆をとり

シヤンデリヤ明日と云う喜びを照らす

妻の留守カクテル違う味を持ち

大和郡山市 中 内 孚 彦

身の不遇嘆く聖人弟子多し

どつちみち天井の下の哲学さ

アルバイトしてふと触れた人間味

大阪市 和 田 痴 亭

結論をほかして女猪口をさし

口絵難貼つて母なき雛祭り

ボチ公の春は鎖りを引き千切り

奈良市 村上春巳

春が来る雨音を聞く日曜日

春を待つ奈良県営の駐車場

シーズンに入ったことを鹿も知り

河内長野市 森本黒天子

白髪染めすれば持てるに定つたり

好きな娘に奢りたいくせまだ抜けず

好きでよし野心を持たぬ好きでよし

八尾市 宮西弥生

長靴で出稼ぐ女に朝の冷え

抜け道をまた考えている多情

日雇いの背に夕焼ける明日があり

尼崎市 中溪慶彦

介入を許さずそれも処世術

晚酌の味を忘れて復職す

豹変の術会得して恙し

羽咋市 三宅ろ亭

子らは街写真に妻は呼びかける

活けた花ほめれば妻はお茶を換え

P T A たまには出さぬことも決め

米子市 林瑞枝

ふるさとの香り病いの床に活け

注射して祖父初孫に逢いに行き

分別の年輪白髪がちらり生え

新居浜市 村上水軍

噂する別れ話を聞きたがり

新しい服を着せても二り台

金のない恋は夜露に濡れて行き

大阪市 西本保夫

腰縄の方が陽気によくしゃべり

住友のバツジが邪魔なネオン街

学卒へサンづけで呼ぶ平社員

大田市 藤田軒太楼

資金繰り世間話に実が入らず

生活のゆとり笑いに巾が出来

運勢欄今日は女難と喜ばせ

大阪市 古川静波

豆むぐ夜母のソネット聴えそう

新型が憎い隣に追いつけず

白血球検査

病歴の古さ白血球が減り

竹原市 三宅不朽

愛憎の極まる音で椿落つ

みちのくの風の中なる旅ひとり

陽はうらら蟹の穴さえ春らしく

出雲市 王紫

不覚にも愛の誤算をして別れ  
どん底に居てどん底と思つてず  
話せば解ることが漸く分りかけ

広島県 南 条 露 声

てこずつたとこだけへべれけ記憶せず

メートルが上り部長が酌にくる

据膳が妻何よりの慰安旅

岡山県 瀬 戸 山 文 平

三面鏡夢は三つにたたんどき

勝利者としての近道見当らず

宮崎県 野 口 卯 之 助

いい着物他人行儀のような妻

警察を呼ぶなら呼べと言う啖呵

名古屋県 花 東 千 久 良

憎い筈なのにおとこへ書き綴り

年頃を塗らずに過ごす目鼻立ち

大津市 堀 内 暁 風

母と娘を姉妹などとおだてられ

顔の皴化粧もしい年となり

大阪府 井 上 美 恵 子

一癖も二癖もあり低姿勢

おしやべりなドレスうつかり乗りすごし

広島県 高 橋 鬼 焼

考えたあげく夜汽車のつれとなり  
死ぬ事がこわいと思う注射針

竹原市 小 島 蘭 幸

好きな人いるとハツスルしてしまひ

酔いましたと自分で言うはめでたい日

桜井市 岩 本 雀 踊 子

土一升金一升大阪は空にのび

のむだけの楽しみと知るので仏

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

金になる拍手はつきりたたかかんか

林檎の大きさを比べて膳に着き

島根県 小 砂 白 汀

痛む身をさするが如く春の雨

古顔と成つて病院通いの悲し

笠岡市 谷 本 鈍 愚 坊

相談はせずに高校私立にし

卒業は出来そうになし米作り

宇部市 櫛 部 い さ 夢

錦着て帰郷をすれば消える金

孫連れて酒なき花見悪くなし

島根県 石 田 清 泉

貯める癖ついてたばこのむだを知り

工事場の忙しく動き春の音

島根県 堀 江 正 朗

額割つた僕が箆筒に詫びを言い  
働きに出た娘ひとりで此の空虚

身ごもつた時より産む日に有る迷信  
安いやの混雑いやだけれど行く

島根県 大 森 孝 華

島根県 堀 江 芳 子

見送りへすぐ泣く夫は留守をさせ

物価高春斗はるの風のにのり

玉子酒風邪をおきれば飲んだあと

僕ひとり入るお風呂は成長期

竜野市 森 下 峰 子

貝塚市 行 天 千 代

お守りも入れてスキーへ送り出す

恋愛を良縁とせず父頑固  
選挙だけに帰る議員に票を入れ

病夫でも居りやこそ世間ばかにせず

鳥取市 藤 本 征 也

尼崎市 平 井 露 芳

満よりも数えて値打でる九十

ストラックス良妻賢母の線を見せ  
よつぼどの自信モデルになりましたよか

あの世まで相続と云う税が追いつ

千葉県 鳥 飼 春 泥

仙台市 川 村 映 輝

初登院万骨枯らして胸をはり

恋人をとじこめているペンダント  
肥れない事に娘をうらやまれ

ネオンの魅力故郷を遠くする

米子市 八 木 千 代

大阪市 田 中 多 幸

正直に答えられないインタビュ―

母の眼に助太刀されて口を切り  
再会の酒に酔えない過去があり

油断から我が家で火葬になるみじめ

羽曳野市 河 原 林 比 呂 路

鳥取市 近 藤 秋 星

雑草が一番先に花を付け

妻と旅鶯の声をきいただけ  
顔修理身体髪膚云うとれず

授業さぼつて来たらしいのもいる桜

西宮市 船 津 千 夏

占い展にて(二句)

倒産の社長は気楽にたべてゆき  
極彩色の瓶で花が死んでいる

大阪市 藤 田 頂 留 子

愛媛県 澄 本 満 子

ラツシユアワー泳いだままで駅につき  
おねんねで困る息子のいい胸毛

岡山市 行 吉 照 路

主婦の座は集金人の声をあて

洗い髪妻は声まで若返えり

堺市 羽 田 一 扇

戸の音が市場へ行くを鈍らせる

ベッドタウン目礼だけで二年住む

出雲市 森 山 健 太 郎

商いの他に麻雀でも儲け

もう恋に無縁な男意匠箋

北九州市 藤 田 独 楽

カラーテレビ相撲も漫画も見逃がさず

奥道後温泉

刺青のお客もまじるジャングル湯

下関市 志 賀 木 石

春の風邪も一緒にひいて老夫婦

君の瞳の中に幸せそうな僕

伊丹市 後 岡 と し み

南紀銀婚旅行する

タクシィの顔でとれたは二流館

看護婦のつもりの妻と飲めぬ旅

岡山県 池 田 蛙 浪

ビルの谷思わぬところに月が出る  
そんな日もあつた東方君子園

大阪市 Y ・ N 生

研修の美名で長をしごく会

銀行もマスクを脱げばサタンめき

松江市 錦 織 陽 子

回復期鏡の中で瞳が笑う

洗面器に癒える日近い顔うつす

大阪市 小 東 琴 女

木枯しをおしてゆく夜に恋があり

知らん顔ばかりでんなど飲み仲間

尼崎市 中 谷 利 美

体力の限界和解のきざし見え

曙を徹夜のペンは背に感じ

伊丹市 貴 志 千 尋

上役のメンツ皮だけ残しとき

七人の敵その殆んどがいる社内

大阪市 江 城 功 雄

名門の生れに抵抗感ずる日

うつむけばずれるメガネへ文字憎む

広島市 岩 谷 二 三 枝

ペンだこを汚して今だに平社員

基敵も来ず日曜を寝て過し

七尾市 松 高 秀 峰

縁談へ免許状が並べられ

団地の目意識して買うカラーテレビ

高槻市 山 田 スミ子

盆さいの好きな父ちやんへついてけず

鍵つ子にすまいアルバイト止めにする

愛媛県 関 本 柳 剛

物芽ぐむ巡回守衛の親しい瞳

姫路市 前 田 芙巳代

只一言好きといえないまわり道

新潟県 高 野 不二

自民党支持する程でない端株

大阪市 半 田 夏生

叔父急逝

のど仏ぬくみのさめぬ俣拾らう

三次市 和 泉 松 風

会議には三時のオヤツもふんはつし

大阪市 武 居 寿美司

おしるこのあと口塩昆布に助けられ

竹原市 時 広 一路

春の風燕迎えるように吹き

京都府 菊 沢 破天

ステツキも杖といわれる年になり

高知県 山 川 勝子

中風よりまだと骨折を他人様

高知県 岡 本 香 芳

ともかくも信じて待とう波の声

松江市 内 藤 喜 夫

末席の正論空しく否決され

高知市 田 内 文 子

女とは泣いて勝ちたい性を持ち

堺市 斉 藤 亜 也

年越の残りの豆を噛む寒むさ

羽曳野市 菊 地 茶 坊

デッサンのままで秘めあり恋の夢

八幡浜市 別 宮 すすき

方言の便りジーンと胸にくる

鳥取市 小 林 由多香

やりくりで疲れて妻の深い呼吸

大阪市 池 田 豊平次

アルバムに遺れるえみに又なみだ

香川県 進 藤 いつむ

爪摘んで今日会合の準備終え

大阪市 田 島 英 夫

更年期障害パパのくどい酒



## 近 詠

名古屋市 鈴木可香

追抜かぬリフトのマナー学ぶべし

保護色という奥の手も神の慈悲

和歌山市 秋月宏方

猪口などで飲んでやけ酒気が晴れず  
左様ならゲームという手もあると諦めず  
菓子折の折まだいくらかは脈があり

戦争の余燼が煙る叙勢沙汰

今治市 長野文庫

老夫婦古い話でまた笑い

足並みを時計に合わす定期券

米ソもう月清しなど詩にもせず

## 初作の思い出

奥谷弘朗

マロウズをあてに手套を縫いそこね  
これが私の処女作品である。

たしかシベリヤの俘虜生活三年目の冬だったから、昭和二十三年のことである。

俘虜の身で川柳を作ったと云ったら皆様も不思議がられることかもしれないが、作句したいきさつというのはこうである。

俘虜も三年目にもなるとだいぶんゆとりが出来て、民主グループを作って色々活動を始めだした、私の収容所は、バイカル湖を少しヨーロッパに近いシベリヤ鉄道本線のタイセットの町から、三百キロ程離れた密林のな

かの孤独な田舎町で、昔から流刑囚の町として知られていた。

収容所には二千名ぐらいの日本人俘虜が丸木小屋づくりの監獄舎で生活していた。

シベリヤの十一月はだいぶん寒くなる。

絶えず切々たる望郷の念にかられて、暮している日本人俘虜たちにとって十一月の革命記念日が一番楽しい日だった。

三日間は作業休日が続くのである、この作業休日の行事として、文芸コンクールを収容所で開催することになった。

紙も鉛筆も不自由な俘虜生活のことだから、そう大げさな行事は出来なかつたが、二千名もの俘虜のうちには色々な人間がいたと見えて、小説、詩、短歌、俳句、川柳、等を募集したら、相当の数の作品が集つたようであつた。

私は川柳が好きで、満洲時代は雑誌に掲載される例の谷脇素文氏の漫画入りの川柳をよくあさつて読んだものであるが、自分で作句したことは一度もなかつた。

それが川柳を作つて応募した訳である。たしか川柳の応募者も三十名ぐらいあつたように記憶している。

「マロウズをあてに手套を縫いそこね」この句がなんと天賞に抜けたわけである。

意味でソ連では、零下三十度以下になると、国民休日とされているので、俘虜にもそれが適用されて作業休日になつていた。

句意は、明日はこのぶんだときつとマロウズになるから、マロウズ休日に手袋の修理をすることにしてお手袋の修理をサボつて寝てしまつたら、翌日はマロウズにならずに、破れた手袋で作業に出なければならなくなつて寒い冷たい目にあわされたと云うのである。

この句で、寒かつたシベリヤ俘虜の生活を思い出しては、何時も苦勞を共にして生きぬいた、戦友を思い出すのである。

この天位だった賞品が、何んぞ、黒パン百五十グラムと、鉛筆一本だったことも忘れ得ぬ思い出の一つである。



ヒロ市のヤシ島で多久志、静子夫妻  
「伝説の島」

## 観光の日本人

夢のハワイといわれる、その風光を讚美する言葉は到底我々の筆では尽し難いと思うので、観光中に聞いた話、感じたことで誌面を埋めさせて頂こう。

海外への自由渡航が許されてから四年、所謂、猫も杓子も外国へ外国へと見聞を拡めに行くのはいいが、到る処で恥を知らぬ不行跡を残して、日本人の評価を落しているという話は、今迄にしばしば聞かされたが、今度ハワイ島ヒロの一流ホテルで支配人から聞いた話は、頭から冷水をぶっかけられたような思いであった。

それは、最近、某ガム会社の招待旅行客団

が、このホテルに泊り、寝まき姿で廊下へとび出したり、ロビーへ現れたりはまだ我慢も出来たが、夜になると、四五人ずつでフロントに来て、「どこか女の居る所へ案内せよ」とのご注文。

日本語が解らない振りをする、拳骨のような格好の手を突き出して「これだ、これだよ」と言うに致ってはこちらが顔を赤くしたとのことであった。

又その翌日、バスがキラウエヤ火山の火口展望台につくと、ドヤドヤと降り立った一行中、十名ばかりが一齋にその場に砲列を敷いて、生理現象の処理をやったのには、附近に居た欧米人も顔をそむけたそうである。

この話をしてくれた支配人は更に続けて、「私も母国を知らぬ日系人ですが、尊敬する父母の生れた国の方々には、つとめて親身なサービスを考えているのですが、こんな人達

## 再びハワイを訪ねて

### 若本多久志

がたくさん、ハワイに来られたのは悲しいことですよ」と結んで淋しく笑っていた。

実にその通りで、我々はもう四等国民ではない筈である。世界でも例のないと言われる戦後の復興を成し遂げ、続いて産業、経済の伸展、生長を示した日本、その国民が、「旅の恥はかき捨て」とばかりに、節度を失いエチケットを忘れた国外での不行跡は、深く慎しむべきことである。

特にハワイ今日の隆盛は、明治初年以來・日本人移民の一世や二世達が誠実と勤勉によって築き上げた功績にまつ処多く、全住民の日本人に対する尊敬の念は随所に顕れており、現在ハワイ洲の政治、行政、立法の府はもとより、経済、金融界の重要なポストを握る大半の人は日系市民で占められている現状に対しても、この国へ来ての不謹慎な行動は、これら日系人への顔に泥を塗るようなも

のである。

私は静かに麻生路郎先生の遺作

古くとも僕には仁義礼智信

路郎

の句を思い浮かべて自らの襟を正した次第である。

### ワイロー社句会

何と言っても趣味の友は懐しい。はるか三千海里を距てたこの群島の一角に、同じ十七文字の詩を詠む友を訪ねて、語り合えるさえ楽しいのに、わざわざ私の為に、歓迎句会を催して頂いた、ホノルル、ワイロー吟社の方々に、深い敬意と厚い感謝を捧げるものである。

五年前に渡布した時に開かれた夏の家の歓迎句会でお目にかかった柳友の外に、新しく川柳塔の同人や、誌友になっておられる方も加えて二十名余り、生々庵理事長の色紙や、栗、小松園、梅里諸兄から寄せられた短冊等をお土産に差上げてから句会が開かれた。

兼題「世評」と「電話」の選と披講を終えてから、「いのちある句」についてのお話をした後、作句上種々の問題を話し合い、一層柳友としての絆を強くすることが出来たのは幸であった。

それから、あき坊氏の接待による酒宴に移り益々、談論風発、名残り惜しくも一同散会したのはさわやかな夕風がそよぐ頃であった。

た。

翌日、魔法麗氏のご好意でKOH O放送から、「川柳の話」と題して三十分、一般にわかるような川柳談を放送してP・Rが出来た。



ハワイワイロー社の柳人諸氏 (多久志撮影)

デーの祭日、折よくカネオへ在住の従兄岩本あき坊氏訪問かたがた布哇各島観光中の関西柳壇の重鎮若本多久志氏の歓迎を兼ね、あき坊氏の招待にて開催、魔法麗、曉舟、泉水、三石、萬里歩、浅太、柳葉、拜山、北海、快夢起の十名、ヌアヌ曹洞宗別院前に集合、カネオへ向け出発した。

定刻三時に開会、まず西尾栞選の「官吏」「負け」の選評が快夢起により披講され続いて多久志選の「世評」「電話」が選者によって披講、明快な批評や注意があり、入選者にはそれぞれ選者持参の賞品が授与され、終って多久志氏の柳話「生命のある句とは」一席流石は柳歴の長い、作句経験の豊かな氏の講演は、少数者の聴くには惜しい程なので、近々コホ放送により広く一般に川柳の醍醐味を味わって貰うことにした。

五時句会プログラムを終り、若本夫妻の賛応による山海の珍味に、快談に、時の移るのも忘れる程であった。

「世評」 若本多久志 選  
若後家へとかく世評は色をつけ  
つきあって見れば世評と違う人  
人間の一生世評の中に住む

「電話」 若本多久志 選

お返事は後刻電話とうまく逃げ  
うれしい日電話朝から鳴りつき  
電話では済ませぬ義理の靴をはき

(同地の新聞記事から) 三才だけ発表

ことも何よりの収穫であったと思う。



ワイロー社二月句会は去る二十二日大統領



授与されたのであります。第二部はそれに  
つづいて時事川柳に入ります。時事川柳や詠  
史川柳は川柳でなければ踏みこめない世界で  
す。しかも完全に近い戦後の言論の自由を得  
てはじめてその真価を發揮しようとしていま  
す。

明治時代に日本海大海戦をよんだ句を一つ  
八百萬押すな押すな御観戦 劍花坊  
そして戦後から、今日までの時事川柳は  
ハチ巻は餅代奪った順に解き 要助  
値上げされストされ歩かされ轢かれ  
バッティングそこにあたまがあるからさ ひでお

女性川柳、女性作家はとみにふえ、その作  
品もいよいよ紙上を賑わして来ております。  
女性の句は感情がこまやかに扱われ、大切に  
され、女性でなければという佳句にしばしば  
出合います。

真ごころに動かされけりゆるしけり

梅子

死なないで別れときどき逢いませう

梅子

もう一句

小じんまりおむつのとれた子のお尻 みわ  
「結婚して若いママさん、毎日がただ目まぐ  
るしい。それで彼女はまだで童謡でもうたう  
ような純真さで十七字にまとめている。」と  
三太郎先生は句評していられます。

三太郎先生は川柳略史の最後に現代川柳作  
家の活動ぶりを「いよいよ全国都道府県に必ず  
一つ以上の川柳グループと雑誌があり、自在  
に、全国津々浦々にまで川柳作家の活躍がみ  
られるようになった。そしてその傾向も種々  
雑多、日常茶飯事のうちに人生を描写する一

派、人間陶冶の詩を旨とする一派、社会風刺の  
一派、自由律……複雑多岐な性格をもつ大き  
な文芸にまでなったのである。」とのべてい  
られるのであります。

### 三太郎先生

そして第三部「あの日のころ」に入りま  
す。最初の「川柳五十年」は三太郎先生の自  
伝抄でありまして、明治二十四年、キセル造  
りの名人を父に旗本の出である母に日本橋  
の真中で誕生されたことから、川柳人として  
成長していく様子が述べられています。  
久良俊、劍花坊両師の名が述べられていま  
れといったと書いておられます。

そして交友の一人として雉子郎、吉川英治  
さんが出てくるのであります。雉子郎さんの  
句の中から、次の秀句を御披露しておきま  
しう。

日本橋ガンバッテいる馬の糞

掻いだして哀しうなりぬ行李の底

けたものと呼ばれつくして立志伝

大文豪の風格の芽生えを感じます。立志伝の  
句が出ましたので、川柳略史、明治の部に  
江戸川柳の作家、徳川夢声さんの一句が拾わ  
れていましたので、

立志伝腹這で読むものでなし

いよいよ最後に三太郎先生の句抄が出てい  
ます。その中から

百二歳めでたがられてひとりぼち

夜が明けて鴉だんだん動くなり

この二句にはお弟子下村梵天さんののていねい  
な句評がついています。沢山の句の中から  
「陽炎」「下駄」「凄さ」そして「酒」を主  
題にしたものがいくつかみつかまりましたので  
鑑賞研究させていただきますように。

陽炎を食ってるような牛の顔

陽炎は学者の庭へ無駄に立ち  
古川柳の「つくづく」と見れば淋しき牛の面  
とも比べて見ましよう。

船住居下駄さつき見いた下駄の裏

上潮の下駄もやっぱり履くとみえ

金魚鉢泥鰌を入れて凄くなり

泥酔をちつと見ている子の凄さ

身の底の底に灯がつく冬の酒

焼酎の小さき顔と酒を飲む

酒の連作六句があります、その中で

酒をかしフオークで豆腐くらう宵

は一句で十分そのおもしろ味が味えました。

その外私のチェックしたものに

大手術この看護婦の莫迦力

三太郎先生の句は穿ちからつかずはなれ

ず、知に角ばらず、情に流されず、柳界の大

御所だなあと一巻を閉じてしめじみ思うこと

でした。

第一部、第二部第三部の扉の裏に三太郎単

語というのがついていますので精進のよすが

にもと写さしていただいで結びといたしま

す。

〇句は書く前に七たび舌にころがし、書いて

から三たび読み返すべきである。

〇川柳が世にはなとめられていないという人の

あらかたは、なんらそれに努力することな

く、他にのみきびしく、おのれに寛容であ

る。

〇川柳は入口がたくさんある。どこからでも

入れる。だが出口はただ一つだ。それは、

である。に君のいのちの中にはいっていくこと

である。

三太郎先生も路郎先生と同じくいのちある句

をつくれと書いていられるのです。



写真左から生々庵氏、三太郎氏、八千代夫人  
(撮影・薫風)

## 天気晴朗の川柳大会

——三太郎先生の紫綬・喜寿祝賀——

橘 高 薫 風

与された訳である。この間、句集「天気晴朗」「風」「孤独地蔵」は川柳の位置を高め、著書は最近発刊の「川柳二〇〇年」をはじめ数多く著わされた。毎月の柳誌の発行は云わずもがなである。

主賓の祝辞は、わがことのように嬉しくて嬉しくて馳せつけざるを得なかったという信州湯田中の中島紫苑邸老（八十六才）、わが中島生々庵主幹とであった。紫老人は、「三太郎氏の受章に安心してしまふな。」と後進を叱咤された。

次いで生々庵主幹が立ち、路郎先生の告別式に参列して下さった友情を謝し、三太郎先生病臥の際に迷亭、唾三味両氏に案内されて病院に見舞われた時を追憶して、案内をされたお二人が共に幽迷境を異にせられた今日、三太郎先生のすばらしいご健康ぶりに感慨深

いものがあると述べられた。そして、褒章受章の際のジャーナリストを前にされての謙虚なお言葉に感銘、われわれも川柳一途に励まねばならないと覚悟を新らたにしたと述べて、最後に、霞乃先生のメッセージを披露されて祝辞を結ばれたが、全国から集った柳人多数に、川柳塔に中島生々庵主幹ありとの感印象づけられたことは本社としても同慶の至りであった。

三太郎先生の挨拶は、好きな時に好きなことを好きなだけ気ままにして来たのを表彰されて戸迷ったのだが、五百通を越えた祝電、祝辞に、川柳のために川柳界のためにご同慶だと云われて見て、これは自分のためでなく、川柳界に貰ったのだと解釈し初めて納得出来た次第である、とユーモアに溢れたしかも風格あるものであった。

川上三太郎先生の紫綬褒章受章、喜寿祝賀川柳大会は、若々しく華やかであった。

時は昭和四十二年三月十九日、快晴の日、所は湯島会館。

定刻午後一時、片柳哲郎氏の司会により渡辺運夫氏の開会の挨拶から始められた。

次いで三太郎先生略歴の紹介。先生は明治二十四年一月三日の生れ、十三歳頃から川柳を手初められて六十五年に近い精進が実を結び、昭和四十一年十一月十八日、川柳創作と指導育成の功により、栄えある紫綬褒章を受

川柳研究社幹事一同からの記念品の紫檀文  
 机の目録が関口六佳史氏から贈られ、三太郎  
 先生へは、福島真澄さん、令孫悦鼓さんお  
 二人から八千代夫人へは宮崎慶子さんから



会場・湯島会館を埋める柳人諸氏

花束が贈呈される頃は、祝賀会の雰囲気は  
 最高潮に達し、参会者の拍手は満場を揺るが  
 せるばかりであった。宿題「紫」村田周魚選

(磯部鈴波披露)、「川柳」川上三太郎選の  
 披露が進められたが、三太郎先生の軸吟、  
 川柳のその果てにあるものを追う  
 には老詩人の執念が感じられた。

次いで祝電の披露、その多数の中に川柳塔  
 社や、清水白柳氏からのがあった。  
 そして、乾杯の後、テールスピーチをは  
 さんでの自由懇談になってパーティ形式の交  
 歓が楽しく華やかに繰り展げられていった。

佐藤正敏、片柳哲郎、時実新子、羽淵礼  
 子、福島真澄、宮崎慶子、西郷かの女、西来  
 みわ、ら幹事は、すべて三、四十才代であ  
 り、ひとしく三太郎先生の序文を頂戴してす  
 でに立派な句集を出版されている。この祝賀  
 会の若々しい華やかさも三太郎先生のご健康  
 も、前者幹事に加えて、編集人の渡辺蓮夫、  
 三浦三朗、寺尾俊平、松井清志、青葉諸氏の  
 発案とした生氣に由来しているであろう。  
 三太郎学校の人達は個々に武人の風貌と、姫  
 君の容姿を備えておられて誠に羨ましく感じ  
 たのであった。

富士野鞍馬氏の音頭で万才三唱をして閉会  
 としたが、今日の祝賀会で終始感激の瞳を  
 うるませておられたのは八千代夫人であつ  
 た。その喜びが、その内助の功のいかに大き  
 いものであったかがしみじみと伝って来て身  
 のひきしまる思いであった。七十才だとお聞  
 きましたのだが、大変お若くお見受けした。ど  
 うかご夫婦ご健康で益々川柳界の発展に寄与  
 して下さい。そして、三太郎先生、路郎先生  
 の分まで飲んで下さい。

## 川柳塔社常任理事会

四月四日午後六時から本社で常任理事会が  
 開かれた。

地方同人諸氏の本誌へ寄せる熱意などを一  
 三夫氏から報告があった。備前川柳社創立二  
 十周年記念大会には、北川春果氏夫人ご病氣  
 のため、春果氏の代選を清水白柳氏がされる  
 ことにきまる。

生々庵氏、薰風氏は三太郎先生の祝賀川柳  
 大会に出席された感想をのべられた。

一般購読者の無届け三カ月滞費には帳簿の  
 整理上送本をとめることになった。

七月旬会の路郎忌は自安寺で開催。

出席者―多久志・梅里・生々庵・白柳・形水  
 ・文秋・庸佑・古方・薰風・一三夫諸氏。

茶  
 グリル・ラウンジ  
 パーティ・ラウンジ  
 展 示 会 場

喫 茶・グリル・ラウンジ

# 御 門

G Y O M O N

心齋橋大丸・そごう東入る  
 TEL 271-6684

# 初歩教室

題 — 「花だより」

## 菊沢小松園

季節的な題、割合に詠草の範囲は広く、創り易い部類の課題だとおもう、随ってこれが反って安易に作られた観がないでもない。なお、御断りして置かなければならないことは印刷所の手違いで締切日と発表月がズレ、ご迷惑をおかけしたことをおわびいたします。詳細は本稿末尾をご覧ください。

御見合のこともふれた花だより すき  
花だより次の休みは間に合わず 瑞枝  
日本の春かみしめる花だより 千代  
五分咲きの頃から回るパトロール 同  
退院のベッドへとどく花だより 花子  
合格の春を嬉しい花だより 同

かさも現われて練達の佳句になった。第三句、大味な、句柄の悠長な殊に中のかみしめるがよい句にした。第四句、川柳家の眼が、想像から、飛躍して実在にしたのだろう。川柳らしい川柳としての面白さを頂く。第五句春になった嬉しさ退院が、二重の喜びになった明るい句。第六句、これは合格と花だよりのダブル、時期だからたぶん入学のことだろう、これも明朗な句。

禁酒またそのままとなる花だより 秋月  
花だより日本列島平和なり 同  
窓ごしの桜ですます療養所 千梢  
ホスターを見るだけでよし花だより 亜也  
安静の身にもそくそく花だより 八郎  
花だより団子のとこだけ素通りし 同  
花だよりウイークエンドのブラン立て 初甫  
第一句、春から始める禁酒は続かぬと聞いている。それは酒飲む機会が多いと云うことからだろう。この句もそれを云っているが、

句の狙いは浅い。第二句、花見も、花だよりも平和あってのこと、戦時下でも花は咲いたが、花見どころではなかった、ずばり大担に言い得てよい。第三句、療養所の花だよりは窓ごしの実物で、日本人の感覚はたとえ療養所生活でも、春はやはり花見ほしたい。それを窓ごしの花ですましたという、暗い影のないのがとてもよい。第四句、今年もとても花見に行けそうにない、通勤の朝夕に見る駅の花だよりのホスター、この見るだけでは決して満足している意味のよしではない、むしろ今に見ているの意味のよしでなければこの句は生きない。第五句、病院生活の身にも次ぎつぎ花だよりが聞える、安静の療養を混乱さすように。だが、療養所として、社会の一端、浮世の風は用捨もなく吹き込んで来る。第六句、花だよりが素通り言い得て妙、沈滞しがちな病院生活も川柳家の眼はユーモラスに暗らさのない句になったやがて加療なって花だよりの素通りしな日々を祈る。第七句、この句もなかなかギャグの利いたよい意味の鋭い句になった。時局柄のまま黒い霧の好きな一部の代議士連中に当ててもよく利く、第八句短かい十七文字の枠の中に川柳のよさは、生活環境も、生活の程度さえも窺える、生活の余裕と云うものを滲ませて句主の練達さを見わけている。

故里が恋しくなった花だより 寿美司  
退院を待つ身へことした花だより 句楽坊  
海越えて祖国へ届いた花だより 白汀  
花だより日本列島を南から 同

ほんとうは顔が見たさの花だより 千夏  
附添いの機転で切られた花だより 同

第一句、故郷からの花だよりに、久しく帰らぬ故郷の山河が急に恋しくなった、都会へ出てはまだ純情さを失なわぬ好青年が浮かぶ。第二句、この句ことしの花だよりがよいこれで去年も入院中だったことも句外に判つて退院の喜びがぐつと響く、用語の重要性を教えている句。第三句、これは例のアメリカへ贈った日本の桜の花だよりであろう。今更罌堂老の遺徳を偲ぶ。第四句、南北に長い日本の花だよりは南から次第に北へ伸びる。いささか理屈ばいがよく判る。南北に長い日本の花だよりか。第五句、これは微笑ましい、薄絹を通して見る春爛漫の句、上五が印象的でよい。第六句、同じ病院の句でも、附添の動作を生かして、病人の容態まで窺えるこの句中七が光る、佳句。

婚約の知らせと共に花だより 比呂路  
花だよりいい娘もいると書き添える 峰子  
日曜までは待ってくれない花だより 保夫  
花だより沿線名所ばかりなり 百酒  
会いたさを秘めて蓄の花だより 紫  
逆輸入されて桜の花だより 同

ひらがながはみ出しそうな花だより 芳子  
便箋へ蓄も入れて花だより 同  
第一句、婚約を知らせのついでに花だよりも書き添えてあったとの意、思い付きの句境で底が浅い。第二句、やや中の方は趣が違う掛茶屋あたりのママさんの客への誘いの手紙であろう、花だよりの題詠で、此処まで持つ

て来られた努力を高く買いたい。第三句、次の日曜でなければ、出掛けられないのに、花はそれまで待つてはくれない。生活の厳しさは今年の花もお流れか。第四句、鉄道の案内電鉄会社の宣伝、沿線至る処、花の名所だらけとの皮肉、やや平凡に墜して月並。第五句、会たさゆえにまだ蓄の花をもたよりに使う、あわれ秘めた恋の果敢さか、ヤングレディの胸の秘めごと。第六句、これも白汀さんの前掲の句の同巧の境地、この桜の花だよりは難渋、花だよりとは桜のことを現しているのだから一考のこと。第七句、この表現はうまい、平仮名がはみ出すとは、句主がそう感じたのだから説明の入らない主観だ、宣伝ビラの花だよりに、充実した春を感じたのだ。大人の句として頂く。第八句、この句はまた月並、少女趣味ですでに古い詠みかすみたいな句材。

壁一ぱい駅は呼んでる花だより 正朗  
名物も名所も招く花だより 同  
積立がちよっと足りない花だより 清泉

### 路郎川柳手拭い

子沢山

僕のまくらは

何処へいた

送料共 百二十五円

また霜が蓄は固い花だより 同

第一句、これも駅の花だよりの宣伝ビラ、上五の充実ややや救われても、句材が平凡を脱れまい。第二句、これも内容が浅い、誰もが創り誰もが思い附く句はいい句とは言われない、平凡。第三句此の世は先立つものは入るところ、花見も金が無くでは行かれない、積立をおろしても足りないとはお寒むい花見花見を主にして見た場合面白いが。第四句、また霜が下りた、だが安心してくれ蓄は固いとなると花だよりとはいささか緑が遠のくようだが如何。ちよっともたつく。

選者吟

電波にのるさくら日本へ一世二世

花だより故郷をすて一と昔

六月二十日締切 八月号発表

題「壁」

註「鍵」は六月号発表。「雲がくれ」は七月号に発表いたします。

宛先 大阪市阿倍野区王子町丁三番三号

菊 沢 小 松 園

### 川柳塔柳箋

サイズは本誌と同じです

一冊 六五円  
送料 三五円

冒 険

仲 どんたく 選

冒険に負けて異境に骨うずめ 双楽  
 秒よみが上手冒険すきな孫 寿美可  
 冒険にいとむ女性のコンバクト 昭三  
 命綱夫に持たせて海女潜る 誓二  
 冒険へ男の性が死を悔いず 白汀  
 すきですと云う冒険が口を出ず 甍光  
 冒険小説がまだ面白い亭主 初甫  
 冒険の歴史を飾るミカン船 藤波  
 赤チンを冒険好きの兎に備え 光郎  
 山があるなどと冒険聞入れず 軒太楼  
 冒険を少し描いてみて四十 可住  
 冒険が過ぎたと未決でほぞをかみ 十九平  
 ハネムーン冒険をそる風呂がつき 章雅  
 スポンサーについて冒険の旅に出る 摩耶  
 冒険の色は口紅よりも濃し 千久良  
 計算をして冒険へ踏み出した 古方  
 スパルタ教育ハラハラとる祖母ちゃん 古方  
 冒険はようせすよるめドラマ好き 素身郎  
 笹舟に子の冒険と夢がのり 征也  
 冒険のつもの和服よく似合い 鎮也

奥さんの冒険ちよっぴり膝を出し 無聖  
 もひとりの私が冒険けしかける 千代  
 突風のようにレーサーあゝの世まで 千夏  
 冒険好き谷川嶽に罪はなし 水車  
 けちくさい冒険女房の眼をかすめ 凡九郎  
 冒険の名残りかきなびた向う傷 頂留子  
 この恋にかける生命を母に詫び 英巳代  
 冒険のつもりある日を厚化粧 千翁  
 冒険を相談してるランドセル 不二  
 無論トカケも蟻も食ったと冒険家 七面山  
 植木鉢もう冒険が二つ割り 露声  
 半分は嘘のまじった冒険家 正朗  
 冒険マンガ大人も箸を止めたまま 芳子  
 反応を打診する氣の手を握り 古心  
 佳  
 背水の陣が改装する店舗 春巳  
 パーティが下りる遺骸とすれ違い 多蘭子  
 小心が冒険の氣で保証人 秋月  
 冒険を山に求めたデスマスク 礎山  
 人  
 鍵っ子の冒険職場の母に逢い 瑞枝  
 地  
 死の崖へぶつつけている若さ 多蘭子  
 天  
 助けたいメス確率を考えず 古方  
 軸  
 冒険の決意にぶらす子の寝顔

青 菜

川 岡 靈 眼 子 選

澄み切った山の青菜へ深呼吸 頂留子  
 ヤッホーの声青菜若葉へまごだま 季 贊  
 ほととぎす老に満ち足る青菜の荘 千 夏  
 初老の眼青菜の樹々にあるねたみ 凡九郎  
 目に青菜だが騒音とスモッグと 兎男  
 汗ばんだ胸をくすぐる青菜風 不 水  
 さえずりは青菜がくれの渡り鳥 道 雄  
 行葉が青菜並木に染まりそう 寿美可  
 校庭も慣れて青菜に胸を張る いさ夢  
 目に青菜金のないのをくやしがり 不 二  
 スモッグのビルも青菜の山が見え 幽 谷  
 クレヨンの青菜に花がまばら咲き 千久良  
 トンネルを抜けた青菜が眼にしる 初 甫  
 眼に青菜神経痛も少し癒え 古 心  
 ガスの街青菜も病んでいる並木 公 輔  
 生きているこしみじみと青菜萌ゆ どんたく  
 ランドセル青菜をぬり駆けて来る 旭 峯  
 風船のかかった青菜夢がゆれ 鎮 也  
 ビルの窓青菜一枝尊ばれ 文 平  
 子の図画は黒で青菜を書いてくる 木 魚

課 題 吟

どこで鳴く青葉がくれの雨蛙 光 郎  
 青葉から青葉へ続く社長邸 保 夫  
 お天守の化粧若葉の裾模様 曉 明  
 窓からの青葉へ試歩の松葉杖 代 仕 男  
 分校のオルガンみどりの底で鳴り 芳 仙  
 梵鐘の音は青葉の森を縫い 魚 山  
 癒えた子と青葉の午後の湯に浸り 千 代  
 名園の青葉ガイドの声若し 十 九 平  
 通り雨青葉もシャワー浴びている 紫  
 積立が満期青葉が招いてる 露 声  
 根っこから分家するぞと出た青葉 昭 三  
 待ちぼうけ青葉の裏の白を見る 酔 夢  
 大阪の空へ青葉は口を閉じ 奇 童  
 青葉萌ゆ枯葉に夢を托されて 七 面 山  
 古くとも青葉がくれに恩師の碑 水 車  
 目に青葉鹿は舌から春を知る 春 巳  
 尊厳を青葉が包んでおる皇居 藤 波

住

売り家の庭に青葉は引き立たせ 多 蘭 子  
 めくらの子青葉の色を手でにおい 摩 耶  
 人  
 新緑へ何をすねてるサンガラス 素 身 郎  
 地  
 まず青葉ほめてマイクは喋り出し 無 聖  
 天  
 青葉かげ野良着の乳房兎がもとめ 恵 二 朗  
 軸

★ おことわり

「ショック」の選者、森田名人氏から選句が締切日までに届かず、速達便まで出したが、ついに連絡がつかなかった。何かの事故かと思われませんが次号で選句を発表いたします。謹んでおわび申しあげます。

編集部

「きやり」川柳社主幹

村田周魚氏急逝

村田周魚氏(本名泰助)は四月十一日午後十一時、腸閉そくのため、東京都豊島区西池袋の平塚病院で逝去された。七

十七才のご高令だったが巨灯また一つ消え、哀惜のきわみである。

葬儀は十四日午前十一時から自宅の豊島区高田本町二の一四五九で行なわれた。喪主はご長男、紀也氏。

謹んで哀悼の意を表します。

川柳塔社

第13回愛媛川柳研究大会と

長野文庫 川柳句碑除幕式  
 月原宵明

日時 昭和42年5月14日午前10時から  
 場所 今治市中央公民館

(今治市常盤町四丁目)

兼題 「鉦」「姉妹」「突く」三句宛  
 「建てる」「やんわり」

席題 2題の予定(作句締切11時)

会費 三百五十円(句碑除幕式場へ送迎費、記念写真代共)

投句料 百五十円(当日ご欠席の方は5月10日までに、横4cm、縦18cm

程度の句箋に清記、投句料(切手可)同封)

賞 入賞第10位まで呈賞。

句碑祝賀会 午後四時から開催の予定。  
 ご参加を乞う。

大会事務所 今治市港町八丁目

汐風川柳社

(電②1186)

庇 (ひさし)

入選発表

選者 清水白柳  
投句総数 八百十六句  
入選 七十九句

大阪 頂留子

文化財庇の裏も撮される

倉敷里 風

しもた家の庇を借りる小商人

大阪 照一

雨宿り庇に蜂の巢見つけたり

鳥取 佳女

新聞を庇に甲子園の春

今治 青女

くもの糸庇へ木の葉踊らされ

郡山 宇彦

唐辛子庇にかけて農家留守

福井 雅城

あがつてるらしい庇にばかり手をこま

宮崎 卯之助

廂から庇に飛んで雨を逃げ

西宮 玩柳

無医村の庇葉草干してあり

下関 不水

井池の庇に億の金が降り

下関 春秋

隙見したバチで庇で頭打ち

大阪 凡九郎

痴話喧嘩らしい庇の雨宿り

伊丹 千尋

雨除けへ庇遠慮のないしづく

大阪 一栄

お別れの帽子庇もちぎれそう

大阪 漣

干柿のあとへ玉葱吊る庇

加賀 久雄

庇まで降りて雀は思案する

大洲 暁明

庇からトンボのミイラ風に乗る

篠山 与志

まぶしさへ庇がわりの手をかざし

大阪 恭太

庇借る行商目さましおいて去に

東京 泰造

庇からはみ出たふぐの大提灯

岡山 秋月

ダンパー庇こわしたただけですみ

大阪 保夫

勿体ない庇出店はおことわり

西宮 多久志

バス通り庇こわれたまま二年

大阪 あいき

仕立ものの札が庇の風に舞い

笠岡 忠三

庇までボールが届く子の自慢

奈良 十悟

声がわりしてもう庇まで手が届き

神戸 どんたく

庇髪の母仏壇に若く居る

大阪 形水

輪投げのポーズで庇へ菖蒲あげ

加賀 光郎

走馬灯病む兒に夏を吊る庇

岡山 十九平

さんま焼く煙庇を横に匍い

大阪 弓彦

降るたびに庇が揉める種となり

小松 宗太郎

神輿また庇をさける大団扇

堺 千万子

庇からはみ出しその筋から叱言

庇借ってて税金でもあらまいか

島根 紫

庇からわが家の猫も呼び出され

負け猫のとうとう庇ずり落ちる

西宮 百酒

芥箱を庇へ移す雨つづき

質の字が邪魔な庇の長のれん

島根 明朗

先客があるので庇で聞かぬ振り

庇から湯気が立ってる雨宿り

笠岡 白梅子

庇から外へはみ出す特価品

叩かれて羽根は庇でへそを曲げ

香川 酔夢

庇出すだけに日曜またつぶれ

角帽の庇まぶしい子を見あげ

山口 弘道

子雀の冒険庇からのぞき

庇までのぼり朝顔思案する

和歌山 木魚

ふるさとの庇はみかんの皮も干し

落ちそうになった庇の強いこと

堺 一舟

坪百万庇の下もほっとかず

交番の庇もしばしにわか雨

大阪 春巢

庇まで逃げて猫めは顔洗う  
庇での雀の恋を見ててひま

篠山可住

大阪は庇の下でたべてゆけ  
くもに貸しつばめに貸して庇無事

富田林美房

松屋町庇いっばいぶらさげる  
提灯を吊るにも庇のない団地

小松魚山

電柱のかけが庇に来てお昼  
庇すれすれに嫁の荷が届き

模型機の事故は庇にひっかかり

吳 魁光

表通りになって明治の庇塗る  
改造の足場に庇酷使され

鳥籠を放れ庇へ逃げただけ

五 客

西宮 多久志

庇なら無断でもよい雨宿り

島根 代仕男

監督のサイン庇を二度つまみ

岡山 十九平

庇借ることまでボスが口を入れ

高石 好郎

宗右エ門町庇の粋はまだ残し

大阪 梅里

洗濯挟み庇におちてはとつかれ

人ノ句

庇との間を車掌目で測り

笠岡 忠三

角の家庇を守る石を置き  
天ノ句

東大阪 清人

庇だけ貸して盛り場飯が食え

選者吟

庇見上げて靴ペラを仕舞いこむ

大萬川柳ベストテン

(三月現在)

一 弓彦

二 清人

三 魁光

四 梅里

五 木魚

六 琴女

七 薰風

八 魚山

九 美房

一〇 きさ子

一一 可住

一二 一舟

一三 忠三

一四 亜也

一五 恭太

一六 漣

一七 利美

一八 小松園

一九 与志

二〇 幽谷

五〇 大阪

五〇 小松

四五 富田林

四五 岸和田

四〇 篠山

四〇 堺

四〇 堺

四〇 堺

四〇 堺

四〇 堺

四〇 堺

三五 大阪

三五 大阪

三五 大阪

昭和四十二年度第五回

兼 題「戸籍」五句以内

締切 五月二十五日

発表 六月二十日

兼 題「辞退」五句以内

締切 六月二十五日

発表 七月二十日

第六回予告

投句先 大阪市阿倍野区

松崎町三ノ十

呉服店(五十七歳)

# 雅号ぶっちやけばなし

みさこ



たかはし

高橋操子

(28) 小さい時から遊ぶのは男の子、けんかして勝ったのも男の子相手。本名操(みさこ)も男の子のような名前。川柳をやりはじめた娘の頃、雅号だけでも女らしくと気がついて本名に子をつけたのが操子です。柳友から雅号で呼ばれる時は一番好きです。作句する時も、自分で二、三回呼んで見て女性を取り戻します。家業の呉服店もやさしいような商売で、まして未亡人の私にはまったくの男性経営主の気持です。

大萬川柳会

# 柳 界 展 望

あちらからこちらから  
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼平安川柳社創立十周年記念明治百年全国川柳大会は昭和四十二年六月四日(日)午前九時から京都市左京区宝池国立京都国際会館A会議場で開催。兼題は名刺・青年・雲・灯す・喝采(出句は出席者に限る)会費五百円(昼食、入選句集、記念品代を含む)

▼愛知川柳作家協会第三回総会並に大会は五月七日正午から岡崎公園内巽閣で開催。兼題は微風・走る・つづく・注目・短い、投句は百円封入の上、岡崎市蓬來町一八八番吉佳品宛

▼玉野市文化協会主催市民川柳大会は三月十二日(日)午前十時から玉野市民会館で。

▼川柳江戸川十周年謝恩川柳大会は三月二十六日正午から上一色会館で開催

▼第三十二回奈良県川柳大

会は三月二十六日(日)午前十時から王寺町公民館で開催

▼「こなゆき」三月号で昭和四十一年度「こなゆき」三賞が発表された。第一回冬眠子賞には東田木念人氏の句、「正直に生きよう白い紙障子」など五句が対称になり、題詠賞は小坂竜笑氏が、句会賞は嘉瀬信彦氏がそれぞれ受賞した

▼川上三太郎単語集「この道」発行一周年記念特別募集吟、課題「この道」の特選句は次の三句に決定した

一 道一つ選び動物から別れ  
一 小磯弦舟「この道を歩き終身刑とする」三島一雄「この道でゼニ落したり拾ったり」山田加勢夫

▼宇和川木耳氏(東大阪市)は「川柳人」四二一号から「続大陸柳壇回顧録」を執筆。大陸柳壇の貴重な記録

▼本田恵二朗氏(児島市)山内静水氏(竹原市)は二月十九日児島中央公民館で開催された住友化学川柳会十周年記念近県川柳大会の選者として出席された

▼川柳たましま社では、良寛和尚に縁りのあるところから良寛まつり協賛誌上川柳大会を開催。本社同人から、逸見灯竿、服部十九平、本田恵二朗、浜田久米雄の諸氏と橋高薫風が選者として参加した

▼大鶴喜由氏(京都府)は京都府久世郡城陽町大字寺田小字極尻六九に転居

▼森田老人氏(鳥取市)が三月二十一日寝屋川市の令嬢宅を訪問、清水白柳氏に電話連絡されたが、時間の都合で大阪の柳人との交歓機会を待ち申し上げる

▼川端東雲楼氏(富田林市)は本誌二月号に紹介の「鳥羽玉」からヒントを得て随筆をものし著者志賀氏に送って喜ばれたと

▼大江秋月氏(兵庫県)は先般の団体の異動で、神野駅長を辞職就任された

▼村上春巳氏(奈良市)は柳誌柳茶屋二月号に「かけ

つこしてやるばくの雲君の雲」の肉筆小色紙を掲載された

▼川柳ジャーナル五月号から編纂と募集作品の選は松本芳味氏(東京市)が担当されることになった

▼川柳東京三月号は夢路百句を掲載「ばかな子はやれずかしい子はやれず」などなつかしい句もあるが、「座ぶとんをはみでて無理をいう女」といった句の感興にうなずかされた。「病人へ寄つてたかつてうそを言い」は、豆秋氏の「病人へみんなたかつて嘘を言い」と何れが先後するのか調べて見たいと思う。四月三日の毎日新聞文芸欄の一文に「やがては日本人の間に、死んだら『百首詠』ぐらいを香典がえしにする慣習も、生まれてこない」とも限らないであろう」とも述べたが、夢路百句にその言葉を思いかえしたものである

▼阿部佐保蘭氏(東京都)は五月七日の平賀紅寿氏の出版記念会、六月四日の平安川柳社の全国大会に出席のため西下、六月十二日は母校の大和郡山高校で講演をされる予定とのこと

五月の句会	
<p>玉造川柳会(大阪市)</p> <p>時 10日(水)午後六時</p> <p>所 幼稚園・小学校・魂玉造交差点南一〇〇米、大阪信用金庫</p>	<p>南海電鉄川柳会</p> <p>時 18日(木)</p> <p>所 無人駅・意地悪・うっかり</p> <p>所 ナンバ高架下 親和クラブ</p>
<p>南大阪川柳会吟行</p> <p>時 21日(日)午前十時</p> <p>所 風薫る・鳥居・鹿・休憩所 吟行雑詠</p> <p>所 奈良方面：上六集合会費 百円・食事交通費 自弁</p>	<p>▼東野大八氏(美濃加茂市)は長崎方面へ六日間の出張旅行の帰途、姫路の大井正夫氏宅で一泊、編集部の一三夫氏の慰問を二人で目下立案中とか</p> <p>▼関本柳剛氏(愛媛県)は愛媛療養所内で発行している晴窓川柳会の雑誌編集に懸念とものすこと。川柳塔誌の句にもうごすし詩心の動いている句がほしいと</p>

▼国弘半休氏(下関市)か  
ら、「一月は三社詣、二月は稻荷神社、三月は伊勢南紀の神様詣りで忙しかつた。でも国鉄は一等バス、宿は半額以下という職業柄故、また金儲けのかたわらと来ているのだから忙しい位は我慢しているが、日曜の句会に出られないことは閉口です。」

▼築山快夢起氏(ハワイ)から若本多久志氏(大兄の川柳放送は川柳のよきPRとよろこんでおります。大兄の熱意により近來にない有意義な句会を築しむことが出来、ハワイイロー社の同人は心より感銘いたしましたことと信じます。色紙や内地からの沢山のお土産をありがとうございます。厚くお礼申します。」

▼中筋三幸氏(和歌山市)

### 新同人紹介

加川カ口女

上田紅溪

快夢起・多久志推薦

▼中川晃男氏(松江市)松江市上乃木町字後谷三六四(松徳女学院前) 松江地方検察庁にて栄転。

▼西いわを氏(藤井寺市)「月一回は療友と句会を開いて作句の練習を続けています。」

▼水粉千翁氏(倉敷市)「めつきり春めいて来ました月下氷人の大役など引受けて忙しくしております。」

▼井上旭峯氏(倉敷市)は食道の疾患で岡山医大田中外科に入院加療中であったが、三月九日めでたく退院された。氏の住所が、倉敷市玉島長尾と改称になった。

▼山田季賛氏(高槻市)は三月十一日十二日と新幹線職場の仲間鳥軌会のメンバーと蒲郡、豊川いなりへ。「山陽をめざす話で寝つかれず」

▼岡田拳法氏(善通寺市)は二月二十八日左上肺手術を施行、三月二十三日(誕生日と一致)に第二次手術の予定とのこと。輸血でジーンマシンに悩まされていると。

▼高橋鬼焼氏(広島県)は三月十四日療養生活に別れを告げめでたく退院された

▼林夢虹氏(豊中市)は腎臓障害でガラシヤ病院に入院、結石と診断されたので阪大病院に転院三月二十七日手術された。経過は良好とのこと。

▼魚住満潮氏(大阪市)は精密検査を受けるため三月初旬国立大阪病院に入院された。

▼備前川柳社創立二十周年記念・吉永町文化川柳大会が吉永公会堂で四月二十三日に開催。兼題「握手」の選者。北川春果氏夫人がジン臓大手術のため欠席されることになり、清水白柳氏が代選された。橋高薫風も出席。

▼永田六童子氏(大阪市)は夫人同伴で湯原温泉に遊ばれ、岡山の風来子氏にお会いする機会をなくしたのが残念だと。

▼上田紅溪氏(ハワイ)は川柳塔同加入を機会にますます精進すると主幹あてにお便りがあった。

▼北川春果氏(大阪市)からご入院中の夫人の経過が順調であると明かすお知らせがあった。

▼全国鉄川柳人連盟の事務局変更。横浜市保土ヶ谷区岩崎町四三、国鉄アパートG棟の十、高橋柳子方。

▼長谷沢義英氏(大阪市)は浪速区の大阪市立恵美小学校へ栄転された。

▼河相すゝむ氏(西宮市)四月三日夜から上京、金属学会ほかの会に出席され多忙の由。

▼八木摩太郎氏(堺市)は堺出身の竹芸家、田辺竹雲齊氏の令息久雄氏の日展連続三回入選を期に後援会を組織、四月十五日新東洋における来会百六十名の席上で「幾世までつづく巨匠の御家柄」の祝吟を贈られた

▼橋高薫風(大阪市)は川上三太郎先生の祝賀の会の翌日、会津若松、磐梯高原へ一人旅した。住吉貞康氏の遺族を訪い、椛原湖で氷に穴を開けて「わかさぎ」釣りに興じ冬の旅の醍醐味を味わった。

▼弘津柳慶氏(防府市)は防府川柳会の新年句会で好成績をおさめ、ことしはい年になりそうだとハリキッテおられる。

# 本社 四月 旬会

会場 自安 寺  
七日 午後六時

花信しきりという四月に、この盛会はなんといつてもありがたい。他社の友情で出席もあり、やっと川柳塔も地についたようである。

交通局川柳会の方々を迎えて、ここにまた新しい芽が伸びた。お膝もとの市内の方々の出席率が三分の一にたりないというのはどうしたことだろうか。市内の皆さん、百名突破へご協力のほどを。姫路から毎月ご出席の英巳代さんにつづいていただきたい。

川村好郎氏の柳話は、ご自身の最近の不振をテーマに、スランプへの警鐘を乱打されたが、フタを開けてみると、四月旬会の秀吟は氏の佳句に輝いたのである。ペテラン健在のホームランだった。秀吟杯女流作家第一号がそろそろ出るじぶんではないだろうか。

出席—与呂志・一栄・継之助・笑風・喜醉  
・一三夫・古方・瓢太・双葉・静馬・十悟・太路・武助・文秋・水客・弓彦・よしを・玲人・三司・花梢・滋雀・いさむ・天樹・誓二・柳宏子・好郎・狂二・言也・梅里・加仙・たつみ・一舟・舟遊・水京・美巳代・吸江・摩天郎・痴亭・白漢子・茂夫・明人・淑子・

小松園・凡九郎・多蘭子・葛城・生々庵・六童子・恭太・栞・金三・形水・季賛・美房・千梢・白柳・弥生・孝夫・あいき・葉子

席題「ナブキン」 田中狂二選

ナブキンにつつんで戻る総入歯 痴亭  
ナブキンを取るしぐさにも女の目 与呂志  
ナブキンに母が嬉しい助手になり 与呂志  
ナブキンを汚し鼻紙出してふき 吸江  
ききあきた祝詞ナブキンとあそび 花梢  
ナブキンのカーネーションを母を恋い 一栄  
ナブキンでお髭の泡を拭いてくれ 一栄  
ナブキンを折りつつマダム何想う 一栄  
宴会のナブキン隣りに真似て敷き 太路  
ナブキンをおりおり彼氏の噂なり 白漢子  
ナブキンに紳士マナーを心得る 栞  
ナブキンの下へ隠した忘れもの 言也  
ナブキンへ包んで帰る子だくさん 玲人  
ナブキンを取りに女給はうまく逃げ 一三夫  
ナブキンにそっと包んだところつげ いさむ  
ナブキンを折ったと云う見合ひ 水京  
拭く振でナブキンへ取る堅い肉 水客  
ナブキンへ女を誘う走り書 玲人  
シャンペンの泡ナブキンへ派手飛び 梅里  
ナブキンとホーク見つめて祝辞聞く 梅里  
ナブキンを取る手に愛を意識する 継之助  
ナブキンに包み遠慮へ押しつける 天樹  
ナブキンを付けて花嫁手も触れず 文秋  
ナブキンに愚痴なみ込むバーの午后 静馬  
狂二

席題「日本語」 児島与呂志選

外人の恋日本語でくどき 摩天郎  
辞書に無い日本語漫画家が教え 茂夫  
君が代をつつかい棒にするつもり 水客  
肝心なところを日本語では言わず 笑風  
横文字で聞かれ日本語で答え 継之助  
日本語ペラペラ箸をば使いつけ いさむ  
日本語の訛りへ搜索メドがつき 白漢子  
日本語で問う外人へ手まねする 美巳代  
日本語の判る子どもが仲に立ち 滋雀  
日本語が通じたローマの夜の街 生々庵  
日本語の電文誤解した不運 継之助  
流暢な日本語言語録を解説す 多蘭子  
日本語で書かぬカルテにある不安 痴亭  
青い眼が玉が出ないと言語教 痴亭  
日本語がわからぬのに英語教え 季賛  
パパやママもつ日本語になりすま 季賛  
いやと言う言葉に女裏をもち あいさ  
日本語の角を英語で丸く逃げ 英巳代  
一喝をするに適した日本語 弓彦  
パンザイという便利言葉をも日本 形水  
委員長日本語むずかしいなと思ひ 水客  
席題「若返り」 長谷川三司選

若返りなさいとネクタイ選つて 武助  
若返つたつもり柄だけ派手を着る 一三夫  
若返つたつもりも年齢は争えず 摩天郎  
若返ンゲンやっぱり奥歯ゆるんぞ 小松園  
若返つたなあと再婚ひやかされ 文秋  
若返りさせてあげたい国の母 痴亭  
バジヤマ着た父ちゃん若い冷め 葛城



要領を買われた地位の荷が重い  
 パチンコへ一生行けぬ浩宮  
 金が出来地位も出来たら友が去り  
 地位はどうあるとも好きは好き  
 お金など問題にせぬ地位になり  
 力で来いと地位など眼もくれず  
 責任があつてめったな事言えず  
 地位賭ける発言迄はようやらざ  
 試験制課長の地位がゆらぎかけ  
 元部長だけに職安もて余し  
 来て欲し人は地位など目もくれず  
 その地位へあせらず亀になつて  
 仕事への情熱平でおいとかず

兼題「コンクール」 八木摩太郎選

コンクール日本一の多いこと  
 綴り方大臣賞の子は貧し  
 コンクールミセスであつた騒ぎ  
 ではないボーズもミセス・コンテ  
 満場が坍塌に溶けるコンクール  
 よせばよいと又出て歌うコンクール  
 コンクール合格おしやな娘に変わり  
 分らない文字金賞のコンクール  
 番外でゲストも唄うコンクール  
 体重計へ笑う兒泣く児コンクール  
 コンクール水着姿や春四月  
 音痴には拍手が派手なコンクール  
 コンクール惜しいところで大根脚  
 八等身の胸とお尻が競い合い  
 コンクールに出たら舌を出し  
 民謡でお国自慢がコンクール

天樹 恭太 あいき 白柳 梅里 吸江 柳宏子 白溪子 阿茶 一舟 柳宏子 舟遊 静馬

コンクール女の意地がからみあい  
 赤ちゃんの意志を無視したコンクール  
 コンクール賞状マニヤのちに意地  
 コンクール古稀に免じて敢闘賞  
 コンクール犬はメダルに尾も振る  
 コンクール大学生の出る落語  
 自家用でワンワンのコンクール  
 コンクール親類中がかりだされ  
 コンクール後はミス沙汰聞  
 コンクール残念でしたが続くなり  
 先生といわれる程の審査席  
 審査にも手心コネの娘を撰び  
 学生が人気をさらうコンクール  
 コンクールあいの子という目鼻立  
 痛いところ突かれた作文コンクール  
 同情が拍手に変わるコンクール  
 黒んぼコンクールどれが裏を暴露  
 コンクールおほめに預り選に洩れ  
 コンクール美人こんなにも多すぎる  
 肉魂が火花散つてのコンクール  
 歌手になる野望を秘すコンクール  
 うぬぼれの鼻を折らなコンクール  
 ポリウムでカバールといコンクール  
 出せるだけ出と水着のコンクール  
 モヤモヤを残して菊のコンクール  
 やがてみな婆さんにもコンクール  
 コンクール付きそう母が汗をかき  
 鐘一つ続けて司会と顔なじみ  
 落選がミス準ミスを抜いて嫁き  
 コンクール優勝見せに市長室

小松園 玲人 笑風 梅里 静馬 吸江 阿茶 花梢 静馬 柔房 美夫 茂柳 白柳 柔助 継之助 好太郎 瓢太 十悟 武助 痴亭 多秋 文三 昭三 瓢太 阿茶 一三夫 与呂志 生々庵 好郎 摩太郎

兼題「光線」

正本水客選

水栽培温室育ちという光線  
 早く癒くなれと光線のぞき込み  
 なれているフラッシュ(一眼)で  
 一筋の光線にぬかつき生きている  
 光線の当り具合とうまく逃げ  
 川底の石光線で浮きあがり  
 光線を斜に女の動かぬ瞳  
 コンクールライトに度胸たためし  
 日稼ぎのあすへ陽光降るごとし  
 光線のはいたネガを見せと詫び  
 目かくしをされ落盤を生きてびる  
 光線で親に似ぬ花咲かせられ  
 ベテランの捕球光線に逆らわず  
 朝の陽を拝んで私は明治者  
 一と筋のライトに濡れ場しほら  
 光線をさけるグラスが妖婦めき  
 光線(自動ドア)は律気なめき  
 太陽の光おそれる黒眼鏡  
 光線のとどかぬ地下に生きる業  
 狂乱の蝶をフットライトが追  
 ビル街の光線まがり又まがり  
 病院の光線つめたなものうち  
 陽にかざす掌が節かれて居る命  
 光線の妥協のようなミラーボール  
 ロケーション反射のさ役も要り  
 陽光へまともに挑む若さ持つ  
 だらしない胃を見せレントゲン  
 禅堂の朝の光を膝にうけ  
 まつすぐに木洩れ陽苔の艶となる

季贊 礎山 頂留子 摩耶 欣弥 庸佑 武助 静馬 白柳 滋雀 一舟 六童子 梅里 太栄 静馬 多秋 柔子 淑子 好郎 三司 柳太 一栄 美巳代 多蘭子 天樹

雲裂いて赫と照り出す雨上り  
その美貌ライトの中に泳がせる  
光線の向きまでかえてほめる柄  
竹藪の光りキャンパスは線で書き  
影法師逆光線に削られる  
消灯のとたんに隣の光りくる  
射し込んだ夕陽も飲んだコップ酒  
ぼっかりと晴れて光の束が落ちて

兼題「洗う」 西尾 葵選

眼を洗う妻の返事がうわの空  
過去を皆洗いきよめた花嫁御  
洗い髪まだ女のくたびれず  
濯ぐ手に春がささやく谷の水  
新世帯まごとの程の洗いの土産  
洗うものばかりキャンプの子の土産

雅号ぶつちやけばなし

せいすい



水静内山

やまうち

よしを 舟遊 柳太 いさむ 天樹 明人 蒸太 水客 葵選

湯のみの円さ心を洗う話する  
泣く泣くも色香残して墓洗い  
この分は別に洗えと九谷焼  
心まで洗うつもりひの禪の門  
激洗の洗う奇巖へ立つ茶店  
洗い髪誰はばかぬ肌を脱ぎ  
石鹼の中で初孫逃げまわり  
家洗い新建材を恨めしく  
夢秘めて異国三年皿洗う  
土洗い落せば美男の飛鳥仏  
芋づるに洗えばやはり女あり  
お八つもらう子供さつと手を洗い  
遺言状血を血で洗う仲にさせ  
ねんいりに洗うこの身に式せまり  
鍬と長靴洗って郷里の灯がともり  
大阪の灯にあこがれた皿洗い

水客 誓二 花梢 花京 柳太 梅里 どんたく 喜仙 太路 小松園 好秋 文雅 章子 淑彦 花梢

(30) 私は昭和廿九年の暮、突如T病の  
宣告を受けたが、お蔭様で主治医も  
驚く程、快調一年にして退所は出来たが、川柳と云  
う菌にとりつかれていた。九か月後にして私の夢は  
現実となり、九人で発会軌道に乗りかけた三回目  
の大会後、涙をのみ辞表を書き役員を退く。私は悩み  
苦しんだ結果改号を思いたち、「ひろしま」主幹森  
脇幽香里女史にいろいろ相談をして静水の号を買っ  
た。後日女史曰く「水」ほど勢いの強いものはな  
かった。「静水」は間違っていたかなあと笑ってお  
られたが、以来路郎師の、「川柳は人間陶冶の詩であ  
る」の師の心を心に川柳に静水の号に恥じない人間  
に少しずつでもなるべく、努力を続ける所存です。

国鉄職員・五十歳

御仏を洗う行事は記事にされ  
ハンカチを洗って貰うてもの仲  
好天に欲ばる母の洗いもの  
心洗う牧師の語尾が腑に落ちず  
春の陽に洗うたしの歌も出る  
顔洗ってコイとはこんな顔でっか  
皿洗う音にも看護気をつかい  
もう一度洗えと捜査のあせり気味  
美容食ただ熱湯で洗うだけ  
皿洗う音も険しい倦怠期  
甲子園の土洗濯が借しくなり  
讚美歌で洗うた昔にあった傷  
午前二時板場を洗う法善寺  
下宿か母への土産洗いもの  
洗うだけ洗って後は不起訴なり  
洗うのがテレ臭い程忝げちまい  
洗い浄めた心のつもりへこの鬻り  
ママごとに洗濯するも女の子  
洗うては干し洗うて干し子等違者  
流れ雲妬心を洗う風に立ち  
ホステスの戸籍洗いを肴にし  
洗おうともせぬ口づけにある未練  
身の上を洗えば過去の複雑さ  
圧力がかかって十分洗われず  
洗う程白刃えて来る紺緋  
洗うては磨き磨き洗い凡石だ  
洗いざらい喋って口止めして帰り  
この俺が洗えば会社がつぶれるよ  
手を洗う医者もはっとした笑顔  
継母の躰けきつちり手を洗い  
手を洗うてるところえきてさあれ

白溪子 静馬 六竜志 与呂志 凡九郎 柳太 吸江 いさむ 柳宏子 恭太 弥生 与呂志 多林志 阿茶 よしを 生々庵 狂二 好郎 三司馬 静柳 玩馬 弥生 阿茶 葛城 生々庵 玲人 摩天郎 白溪子 好郎

# あの頃

—通信— 生々庵主幹に

島田兼孝

大正九年大阪薬専を卒業して鰻谷仲之町の桃谷順天館化粧品研究所に勤めましたので、御地は私に取って思い出の所です。

それから間もなく、港区の夕風橋に工場を移転されました。その頃、水府さん、路郎さんは広告部にいられ、路郎さんはよく私の研究室に訪ねて下さいました。

南北さんの御令兄食満藤四郎さんが支配人でありました関係で、よく「はり半」に連れて頂いた事が印象に残って居ります。

路郎さんは昭和十一年頃、亜鈍さんと当大洲にお越しになりました、同志相寄り「小西亭」で句会を開きました。

水府さんとは、松山や別府の大会でお目にかかる機会がよくあり、頗る御健康でしたのに、一時に両巨頭を失い、感慨無量で御座います。

愛媛県の川柳会は非常に盛大でありまして、どこかの句会に参いりましても参加者が多

く、その熱心さに驚かざるを得ません。

(元愛媛県薬剤師会長・愛媛県薬政会長)

## 川柳の省略法

吉田水車

小笠原流宗家の談話の中で、省略は美であると言う意味のことがあった、これは小笠原流作法即ち形の心構えの一つで、文学に於けるそれは又別な意味のものであるが、川柳の省略法による作品にも美しさがあるようである。短詩そのものがすでに省略的であるとも言えるが、なお且つ表現効果上省略法がある。

路郎先生著「新川柳講座」の中にある省略法の一文を拝借すると、「思想表現の明瞭さ正確さを失わない限り無駄な語句を省き、敍

述を簡潔にして、言外に意味を含まそうとする方法を修辭上省略法と称している」とある通り僅々十七音字を有効適切にする上にも是非必要である。

路郎先生のお作

金借りに行けば有馬の夏と聞く、は私の愛語惜かないもの一つである、これは申すまでもなく、金主と頼む人を炎天下に訪ねた処、有馬温泉に暑を避けていて留守に會うた姿が彷彿として迫って来る。同架に置いて申し訳ないが私の句に

その上に虫まで鳴いて別れ際と言うのがある、この上五に敍し足りない情景が含まれていて哀感を伝えるのである。或る事件を詠む場合感動が激しければ激しいほど、省略法で敍してもこれは前書きがないと、長い時間の後に読むと一般的には一寸難解であろう。十七音字でも足りないと思うのに古川柳の武玉川は七、七の十四字詩が多く、又特長とされている、劇作家の川村花菱氏がよく引合いにされた句の、

肩にかけると生きる手拭いは省略法のようなものであるが、そうではなく十七音字全体がきびきびして江戸っ子のいなせな姿が浮んでくる。柳樽初篇にある

内にかと言へば昨日の手を合はせは省略法による句の代表的なものとしてよく知られている。



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。  
金井文秋担当

### 關南大阪川柳会

金井文秋報

才たけて甘えることの知らぬ妻  
物好きな夫婦にされて気が揃い  
交番で兄に叱られる花見酒  
設計図又書き交える好い社運  
インタンわかった顔で叩いて見  
満足をしている母へ聞かされず  
もの好きにはじき手芸に弟子が出来  
姑に甘えてかかる手もおぼえ  
満足な顔でおよばれ中座する  
だまされても満足と云うおぼれよう  
設計図描いて他人の夢満たす  
お言葉に甘えて簿立てられる  
天井を駆けるよ夢の設計図  
物好きが結局丸うおさめて来  
たる事を知る妻エプロンの白さ  
先ず打診してから次のプランたて  
新婚がえがくあしたの設計図  
赤電話甘える声に待たされる  
最低の線満でくらしの設計図  
欲びの線満に聞き取れず  
建て売へちよこちよこ同じ顔が見え  
孤児の瞳に仔犬甘える親をもち

梅里 水客 清樹 柳人 弓彦 静馬 好郎 文秋 美已 滋雀 十悟 凡九郎 花梢 双楽 笑痴 弥生 小松園 柳宏子 静波

### 玉造川柳会 (大阪市)

西出一栄報

物好きな人やと古物屋顔おぼえ  
ミニカーで満足してるうちが花  
もの好きな夫奇術へ引き出され  
もの好きで来たのが熱の入れはじめ  
すかさず甘えごますりとも言われ  
幹事まかされ花見酒一本寄付をする  
もの好きに句会に来ても没ばかり  
顔ぶれを打診してから顔を決め  
指ではじいて西瓜のてりを音できき  
青空に画がく二十才の設計図

何くそと思えど肩こり眼がかすみ  
割勘でするプレゼントたかが知れ  
プレゼント選ぶ苦労の愉しさよ  
愛弟子へ叱言も添えてプレゼント  
銀婚に子等が仕組んだ温泉につかり  
誕生日覚えてくれてたプレゼント  
おもちゃ箱並べて嬉しい子沢山  
枯草に並行線の果てがある  
手掴みの塩へ仕切の汗が落ち  
塩辛のみやげよるこびいける口  
塩断ちの母の悲願へよみがえり  
街路樹はどんどん枯れて排気ガス  
伝説の松は枯れてもバスを停め  
傷心の唄口ずさみ行く枯木道  
山寺の枯木由緒のまま残り  
スモッグがじわじわ枯木にする都会  
春近し枯木何やらささやいた  
格好ええ枯木おまへんか前衛派  
勇ましも味気なしともましの旗  
勇ましく云うことだけは勇ましい  
勇ましい勝つてくるぞと征ったきり  
勇ましい子を夕刊にまにあわせ  
美照梅白章水古滋金風柳中六双天井一静一柳季文  
房一里柳雅京方雀三洞志尼双幸雄樹平馬舟贊秋

### 備前川柳社

横山一声報

日の丸弁当で健康かみしめる  
建国の日の丸高う高うあげ  
日の丸を祝ひ素直に旗を立て  
日の丸を勝った勝ったと振りちぎり  
日の丸を異国で拝む有難さ  
日の丸をたてて明治の心懐しい  
日の丸をたてる日の丸心温うなり  
あばらやの日の丸心温うなり  
日の丸に命ささげて無事に生き  
日の丸の今日一日は空にあり  
日の丸の心を心として恥じず  
日の丸へ平和の光ゆれ動き  
交管局句会 (大阪市) 児島与呂志報

勝浦を上からも下からも眺めて来  
老兵の集い貴様と俺で飲み  
家があるばかりに通勤三時間  
今年から菊の名所の丘に住み  
橋筋のケンケンしたい舗道往く  
絶対安全と云う市電が恩止され  
胸に一物犠牲になつて恩をきせ  
犠牲者は浮かばれぬまま年を越し  
犠牲者が出て通達を又出され  
子のためと犠牲に成つて出来た籤  
犠牲的精神で行く三次会  
歩道橋犠牲ゼロを目指して  
百万の犠牲地盤と豪語する  
うしろ指さされると知る子を背負い  
嫁が来て犠牲の師が邪魔にされ  
入院しても師走落魔に着かず  
栄冠ハスタミナ残るテーブ切り  
大物になって再会ひまかかり  
再会のよろこび道頓堀は雨  
胡蝶

緑雨 春巢 淡舟 鉄見 翠芳 晴道 季贊 茶坊 德松 麥中 漫多郎 鴨子 雅万 天樹 胡蝶





途中下車してまで話まだ続き  
 下車駅はまだまだお知らせ致します  
 途中下車隣の美人へ気が残ります  
 本降りになった所で降される  
 下車させておまけに尻を押さる坂  
 ハイウエイ不便な場所を下ろされる  
 寺の寄附屋根だけ出来てゆきつまり  
 寄附できる顔も揃えて善後策  
 ライバルに先に出させてきめる寄附  
 寄附これでおしおすかと旧家なり  
 寄附金の頭をはねて派手にのみ  
 美しい寄附を汚職で塗りつぶし  
 協力と云う名で寄附を集めに來  
 こっちが寄附してほしいと逃げ  
 実母が来た初夢抱いて施設の子  
 初夢をのぞいてみたい子の寐顔  
 ええ方に取って初夢よめたがり  
 成人祭主催者晴着よろこばず  
 晴着で行けば先々戸がしまり  
 晴着着て恋がほしいと思ふ新春  
 娘の晴着片袖ほどのお給料  
 胸を張っておくれよ垢のついで晴着

オーエスケー川柳会

大坂形水報

年ごろを上衣だけでは包まれず  
 新調の約手握手の手の初出勤  
 再会をうす握手の手のゆきみ  
 手拍子に唄が後からついてぬき  
 泣きかけてあわててママの手に返し  
 展示会あまり高値に手も出せず  
 母の手がそっと涙をふいてくれ  
 手相などは離したくなく手が握り  
 手相など気にせぬやつが榮転し  
 綻びへ針持つ母の手が太い  
 夜も白けやがて生活の音がする

青すみ 青米 金三 きはら 柳太 静馬 花痴 笑林 東雲 半月 栄一郎 梅里 六童子 藤本 好太郎 嘉治 美代 美柳 白柳

この犬は俺の足音忘れたか  
 朝帰り音もたてずに床に入り  
 足音で専務とわかり向きを替え  
 靴音で誰だと分るよきを替  
 目覚ましを止めて又寝る日曜日  
 ジェット機の音も気にせず子は育ち  
 いらだって帰りが甘える猫叩く  
 白夢郎 柳

松江梅里報

酒でさえありや温るかが熱かろが  
 頂上にあつて己れがよく見え  
 逸品の持ち味判った顔で賞め  
 叩いたら動く時計を飾ったとき  
 実印も預けて頼む困りよう  
 ぬるま湯に腰漬けてるような養子  
 梅彦郎

駒つなぎ川柳会

南柳報

狭き門覚悟で受ける志望校  
 兄弟が受験のコツを教え合  
 試験場を出て来た顔へインタビ  
 番号が気になるボクの受験票  
 せまき門よそ見しないでつっぱし  
 青雲を抱く子らの受験の日  
 髪刈れば受験の調子出んと言  
 発表の紙が見る顔悲喜何千  
 勉強の苦勞忘れた発表日  
 一浪も人並ですと又受ける  
 神様も無理だと受験お申込  
 贈り物しから思ふ志望校  
 親馬鹿が寄れば受験のことばかり  
 予備校の苦勞笑って祝膳  
 本土より旗に執念沖繩人  
 世話事にベンも投げ出し耐ま  
 川柳たけはら(竹原市) 山内静水報

水仙を活けて目につく床ほこり  
 康宏

直原玉青著  
 創元社出版  
 二千元版  
 「新しい南画と  
 俳画の描き方」  
 本社でも取次ぎいたします。

ぶっとした父が発した流行語  
 片目のダルマいまにも怒りそう  
 黒板き時計をにらむ試験場  
 桜咲きカバンが歩く新入生  
 兄キの就職きまつてほっとした  
 ベトナムの悲惨母子の手が離れた  
 テスト全部焼いて三年間を終え  
 じんとする校歌卒業もうすぐだ  
 校庭の隅の記念樹花をつけ  
 就職の不安が僕をおびやか  
 春愁の日留り日記ほつてあり  
 新しい教科書早くみたいがし  
 新らしい教科書早くみたいがし  
 漱洗う砕くに惜しい丸い月  
 泣くまいぞ送辞へ鼻かむ人しきり  
 笑うまでカメラを待たず病み上り  
 果立つ子の布団祈りもこめて縫い  
 私生活仕事に合わすのを悟り  
 ギリギリに起るドライヤーだけは  
 もう株に懲りた金庫の曇り勝ち  
 焦立ちには待つ郵便の来ない日よ  
 暖房が完備しての風邪をひき  
 出世コース走る先輩の後を追う  
 配転の朝茶柱が何になる  
 赤ちやんの分もカロリー推められ

勝出 日夫 幹夫 淨美 延子 笑文 万彦 孚子 清洋 扇水 松風 鬼焼 文平 採雨 静漁 柳枝 清三 季太郎 凡酔



★四月二十日に須崎  
豆秋七回忌會が南  
大阪川柳會で開催さ  
れ、豆秋川柳を愛す  
る人たちが「大萬」

の階上はギッシリつ  
まった。  
★本号の柳界展望へ  
薫風氏が書いている  
が、豆秋さんの「病  
人へみんなたかつて  
嘘を云い」の句は、

### 楽しい作品展

第七回関西短詩文学作品展は三月十四日  
から十九日まで六日間、市立大阪中央図書  
館で開催された。

一ト握りあゝ人生は和に如かず 路郎

前理事長の路郎先生の遺墨が正面の高い  
所に、新理事長安田青風氏の軸と並んで出  
品されているのが先ず目につく。そして、  
川柳部門の出品の一郭に、

その日暮しも軒に雀がこぼるよ 路郎

大臣が誰であろうと春は春 路郎

軸がかげられ、これに並んで、

いつわりは月にもあった裏おもて 水府

ほろ酔いのせなに泣き出しそうな顔 三碧

の双幅が掛けられてある。また、  
生けるしるし日本ふたたび栄ゆる日 砂人

白足袋に皺一つなし男舞 砂人

の半截に隣して、

心の眼ひらけばおがむことばかり 生々庵

夢豊か心の扉そっとしめ 生々庵

云い勝てば父の白髪が眼に残り 東洋樹

などの軸が掛り、「番傘」「時の川柳」「ふ

それよりいぜんに番  
傘の小田夢路氏が、  
「病人へ寄つてたか  
つて嘘を云い」を發  
表されて来たこと  
を、もう六、七年か  
前に堀口塊人先生か

らうかがつていた。  
★選者も作家も人間  
である以上、やはり  
思い違いというもの  
は避けられないよう  
におもう。  
★おもしろいといえ

あうすと」の柳人が交互に並んでいて、楽し  
い展覧会である。川柳部門の常任理事生島鳥  
語氏は

御堂筋銀行ばかりなるとする

外短冊が三点、「ふあうすと」の不二也、

星花、律子の諸氏は大作ぞろいで、川柳の氣

力の充実ぶりを鑑賞者に感じさせた。殊に律

子さんの書には風格にまで迫るものがあつた

盃の順日本の祝いごと 不二也

やどの傘いろまちまでのぼたん雪 星花

川柳塔からは、いつもの顔振れが揃い、

序二段も横綱なみに腕を組み 摩天郎

すげかえて見ても値上げをする政治 梅里

明治百年置いてけぼりにされただけ 小松園

幸福な女に見えるボンネット 春果

みんがせてくれるしくみがのみこめず 古方

などが好評であった。他に野迷路氏の達磨

の絵は素人の域を出、夢虹氏の赤い色紙を横

に使用した工夫など面白く思わせた。他に飄

太、薫風の作品が短歌、俳句、詩の大家にま

じって出品され、軸・壁掛・色紙・短冊など

百五十点を越える賑いを見せた。(薫)

ば、豆秋氏が逝去さ  
れたのは36年5月4  
日で、六月号にその  
追悼記事が出たが、  
故花月亭九里丸師  
は、どうおもしろい  
をしたのか、

### 購読者の皆様をお願い

帳簿の整理上、三カ月間無届けご送金のない  
ときは送本を中止させていただきます。

川柳塔社

あいである。それを  
裏書きするように同  
人特集もカタイもの  
になると寄りがわる  
い。

☆いろいろな方面から  
よくおまねきをつけ  
るのだが、現状では  
どこへも行けそうも  
なく、申しわけな  
い。(不二田一三夫)

# 本社五月句会

日時 五月六日(土) 午後六時  
会場 自安寺(妙見さん)

市電下日前下車スグ北側  
(電話 211・1478番)

柳話 若本多久志  
兼題 「ガレージ」 本多柳志選  
「予感」 菊田いさむ選  
「手」 高橋操子選  
「砂」 菊沢小松園選

席題 三題(題と道者は当日発表) 各題三句  
会費 百五十円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

電話 大阪 03 3985 番

6月の兼題 「朝」 「毒舌」  
「ベビー」 「飛ぶ」

## 七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選  
近作柳樽 (10句) 北川春巢選  
課題吟 (各題5句以内)

「足」 清水一保選  
「エリート」 麻生アト選  
「古書」 佐野ト吉選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

## 八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵選  
近作柳樽 (10句) 北川春巢選  
課題吟 (各題5句以内)

「海」 小林孤呂二選  
「寝言」 江国幽谷選  
「表」 王藤甲吉選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

GOLDEN  
O.S.K

の紳士服

スマートで  
着心地のよい



株式会社  
オーエスケー

定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料共)

一年分 千四百四十円 (送料負担)

昭和四十二年四月二十五日印刷

昭和四十二年五月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 中島 隆太郎

発行人 大陽印刷株式会社

印刷所 大陽印刷株式会社

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二二一・三九八五番

機界口座大阪・三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十二年四月十五日 印刷  
昭和四十二年五月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 五月号

# 黒潮おどる 紀州路へ



## 〈白浜ゆき〉 なんば発時刻

急行 第2きのくに…(毎日)…12時45分発

急行 南紀3号…(毎日)…16時38分発

急行 臨時しらはま…(土曜)…13時10分発

## 〈新宮ゆき〉 なんば発時刻

急行 南紀1号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時09分発

●第2きのくにには座席指定券を他の列車は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問い合わせ・南海交通社  
(641) 8686 (341) 5038

## 南海電車

料理も電話も

# 551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

# 豚饅 蓬萊 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋  
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストア

定価 百二十円 (送料六円)